

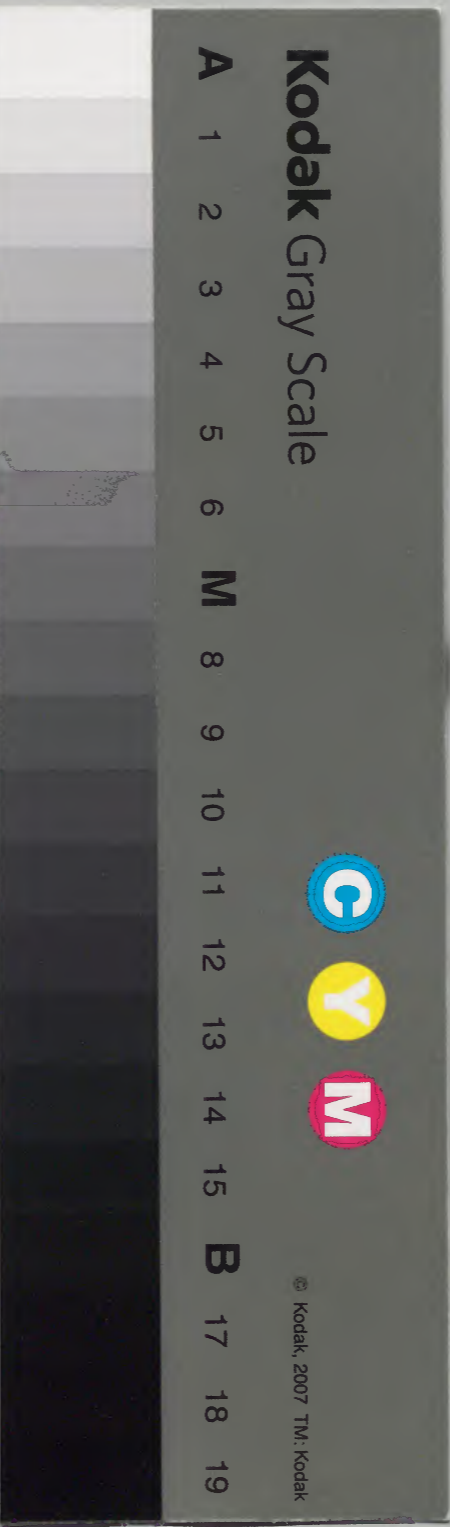
日本書紀傳 廿九卷六

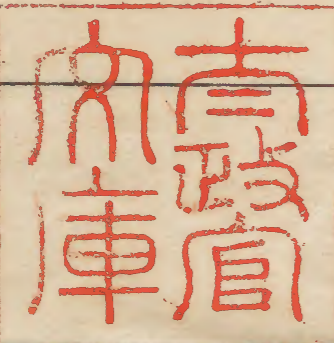
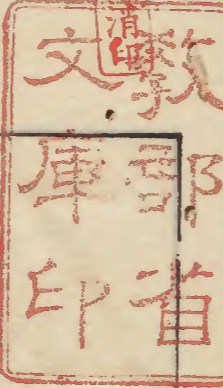
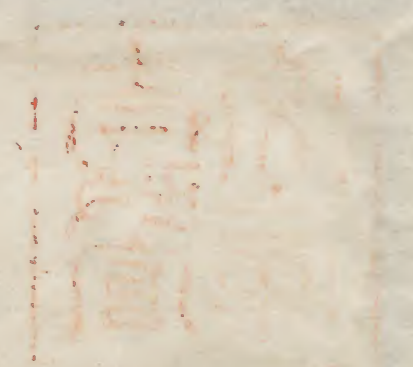
和書
一〇五二二號

九十八

内閣文庫			
番號	和	10522	
冊數	156 (107)		
函號	附	85	1

傳一六八三編





三
美
々

内 一 二 六 八 三 七 八

も更ふく借私記小昆虫之災異の事を問此等災異為
 何哉答此等之類甚多近則蠛蚋害苗之類也と有る此
 事ハ下二百四禁厭の所小引る古語拾遺亦有大地空
 神の故事あるが其も本より昆虫の災異の二列事更小
 論無き物なり此ハ多くハ人身の二列を害を成して令病ら
 方を主と為る所ふれハ猶其説の足つぬが如し一條
 大閤の御説の二列昆虫之災如蝗蝻害苗及反鼻蟻蜂螫人
 等類也と宣はせたること凄み心行て思ゆり事あり
 けれの二列通證の二列引の二列ハの二列各重述説の二列鳥獸昆虫之災異謂
 ず借世俗の二列傳尸病の二列を咒の二列ひて取の二列るふど云事の有
 虫を封の二列ト小児の疳虫を咒の二列ひて取の二列るふど云事の有

日本書紀傳二十九

〇二百三十七

古事記

ハ甚幼げあり事共多きを決めて其効験の有を以見
ルハ決めて神助有る事と思山此等ハ身中子生れ
者あり昆虫の災の○災異ハ私記子和坐巴比乎と
一擧とや云べりむ
有り備此和耶波比と云と和耶ハ本語にて波比ハ辭
あり者あり備此和耶を本語よりと云ハ
上二百十
注るが如く大同類聚方第一章子曾能奈訶美仁万
登比先倭邪奈須裳奴乎耶麻比止伊布と有ハ一身小
纏ハリ擲と着て災を成す者を病と号くとあり其深
井乃慕登比條子阿旨解三邪阿旨阿治味 差乃不
津者耶麻比乃門止亭剝と有ハ上子謂ゆ耶麻比と
云事を部分て悪氣災と意味災との二ハ即其基あり

其惡氣の項より
入り本筋に至りて
是其二種あり

由有り次子阿志計乃毛能乃字奈自豫李母登須治仁
伊當利天阿万祢九美鳥知仁比呂支和差奈志と有ハ
又惡氣の口鼻より入て肺より本筋に傳至りて後藏腑
末太阿之計乃久知波奈珥年流毛乃波布久之典哩
毛登須治仁都多比伊當理臣乃致奈訶倭太仁伊太剝
淡座奈須毛乃美奈於加也味坐登伊 不と有ハ此も
惡氣の口鼻より入て肺より本筋に傳至りて後藏腑
入て災を成す此を犯災と云て其一種あり由あり
又惡氣の味
万太阿志阿治哀吼囉比天伊比布具餘利保乃記能
甫之母屠須治仁通太比无美鳥知二非路支味差奈之

奈^凶夜鬩須^物毋^濃半^娜訶^耶麻^日止^甲婦^奈刹^と有^い悪^き
 食物を喰ひて胃より火氣止し本筋傳ひて身内
 子直りて災を成し惱ます物を内病と云ふ此子
 て上あり阿^悪旨^氣解^災王^邪阿^悪旨^味阿^治味^差の二の然る所以
 を述るるなり次子味^災座乃倭訶知と云條有て一子應^犯
 訶^凶吾^倭邪^二子能^飲民^區日^阿太^利三^子致^乃味^座四^子保^精
 豆^液總^乃於^止侶^陪五^子不^連流^味坐^六子於^比阿^當刹^七
 子裳^邪濃^乃計^八子裳^佐亭^倭座^と有^る 此内子某和邪
 と下子云ざるも災あり事其始子味^災座乃 倭訶知と
 有て著明き事なり一 又其第^智乃味^射の下子母
 止知乃倭邪と云有り第^八

又ハ知須地能知可
 知條子曾能知敷能
 志南和可知し志
 南ハ能和左表志
 里と云事し見え

天殿等詞下津
 網根波府出能福
 魚久又ハ天乃血並
 龍鳥乃福無久と
 云ハ大板詞昆虫
 乃ハ高津神乃災
 高津鳥乃災と見
 高津却寧神詞子
 高津鳥狹子依
 高津鳥狹子依
 為と成す物名を
 是と成す物名を
 是と成す物名を
 是と成す物名を

烏左南味坐の下子保楚知乃倭笑
 次子蒙屠乃味坐云と須會乃倭謝云と奈訶乃味座云
 子布佐岐味坐云と所見たり多何れも和邪との
 有りて和邪波比と云る所一として有り事無きハ故
 有る事なり諸右の如く病の事を何れも災と云ルハ
 病と云ずして唯大凡と云るものと思ふ然子
 非ず病と云ハ其病む人の方子就て云ハ災と云ハ其
 令病者の方子就て云るよと和邪ハ所^ワ為^ガの義子て
 神子在此鬼子在此又鳥獸昆虫子在此其犯し惱ます
 子所^ワ為^ガを成すを云る故此子鳥獸昆虫之災異と有
 子鳥之所為又獸之所為又昆虫之所為と云事あるを
 其成す事の人よと世も害を成せし所以を以て和

邪と云し和邪波比と云し禍又ハ災又ハ災異或ハ妖
此と歎と云又妖孽と云字當言と云成ル者
 ありけり傍斯る患しき和邪を為るハ何物不と云し
 己子傳十 百 十丁 注せしが如く疾病ハ時
 置師神開靈神煩神等有り禍災ハ真跡神以下の六
 神有て皆然る妖氣をせし流布して能人をして
 悩すむる故其即 各掌る神の心あり事を明
可む可き事ありけり 波比ハ神を佐伎波比と云る即
災と有を常ハ災波比と云る也災延よて其事の伸し
弘弘と義ありを忌ふ可し傍此災異を欽明天皇二年
御御紀に出たりけり阿米能和邪波比と訓せたり此
と其意異あり所あり但其ハ天神の所為と心得て違

不事無し猶傳十九卷百四十一 ○攘ハ波羅布あり解除
下萬物 妖の所考合す可し
 を波羅閉と云しハ同言よして其活用異あり傍此ハ
 禁厭の事を為て災異を攘ふを云ふ神武天皇元年御
 紀ハシヘリ掃蕩妖氣景行天皇四十年御紀ハシヘリ振武以攘毒鬼
 と所見たり波良布也此の一例あり傍ハ詠ハ療病之
 方咒也禁厭之被也と云れ其療病之方を咒と云れ
 たりハ説得ぬ事あり禁厭之法を被也と云れたり
 ハ實然る言ふり先大被詞ハ白人胡久美等の難病
 痼疾を攀げ昆虫乃災高津神乃災高津鳥乃災畜仆志
 益物為罪等を被載たりハ全く解除の功驗を得て病

ハ瘴災ハ除ころ可キ故有ハ為あり四神出生章第六
一書ハ伊弉諾尊泉津醜女を遣りて追及也御在ハ坐ケル
ハ故伊弉諾尊拔劔背揮以逃矣因投黑髮と有ハ揮ハ
振あり故ハ棄あり其第九一書ハ是時雷等皆起連来
時道邊有大桃樹故伊弉諾尊隱其樹下同採其實以擲
雷者雷等皆退走矣此用桃避鬼之縁也時伊弉諾尊乃
投其枝杖曰自此以還雷不敢来是謂岐神之有也上二
丁ニ注セラガ如ク禁厭の始ニ謂ハ可キ状あり
其所作ハ皆ガ攘ふるを思フ可ク又已ヨク云ク古
事記須勢理毘賣命の蛇比禮又吳公蟬蜂比禮を其夫神ニ授進クセ

くハて以此比禮三舉打撥と教奉るハ其比禮ハ
振手打振ひて掃ふ具具ふるを此物十種神寶の中ニ在テ
其鎮魂の事を行ニ水を天神本紀ニ若有痛所者令茲
十寶謂一二三四五六七八九十而布瑠部由良由良止
布瑠部と有ハ布瑠部ハ振動ハ事ふルハ此も亦攘
と云ハ異ふる又下二百四十七子引る古語拾遺ふる御
歳神の蝗を除ク夏を教給へ御言ハ宜以麻柄持之
乃以其葉掃之以天押草押之以鳥扇扇之と有ハ持ハ弄ハ
同意ハ事あり次ハ掃と云ハ押と云ハ
扇と云ハ其蝗をして所を得ざる令る事あるハ故子

又曰書子引一素問
之世耶不能遠
入故移情祝由也
と有て註し謂祝
病由と有て祝を唱へ
て病を療ふ事なり
又曰祝官の意は
字に在る蓋し以て祝
有て注し香物而稱
有て注し香物而稱
政説と云い祝又あり
可く嘉草と云い白
茅又い菅ふども此
を以て瘞之所作を
あり事と可見たり

所以厭其心也と注されたり佛石歌に俾止比須都閉
志波奈禮須都倍志と流けたりか如くは厭ふとい離
捨る所以ありふど賢を禁厭ハハハ解除の一種にて其
災異を為す者をして厭ひ瘞ひて災異を無く令る術
ありけり通證前高帝紀東游以厭之註瘞也と有る
如く厭と云字を瘞と注しは其瘞ハ名義
如く波良布又加波流と訓る字にて瘞字も同ト又瘞
字ハ同如く波良布又佐波流又志理叙久又申豆流又
加く具流又奴須年又尔岐波布又美陀流又於久又布
佐具又加和久又久陀久又須都又夜夫流ふとの訓有
て排也辞也升也推也と注せり○禁厭ハ古より麻自
共を考亘して其義を知り可し○麻自
那比夜年流と訓るは從ふ可し私記に依年之也年流
と有る疑有り依年ハ字書に厭を於丹及ふる音を取

れ多ふれば古言の流げ状に非ず鈴屋大人ニ字を引合せの麻自那
比と訓れたり然る事の如くふれとも言足はず唯
大同類聚方は故是番禁年禁自奈比耶年流仁能里阿理と
有る心を得て古訓に從ふ可き者あり然るハ上は瘞ヲモテ
病と有る病ハ其事の終ふり瘞ハ其を去る術を成す
謂ふ多し等しく此もとも麻自那比ハ其事の終ふり
夜年流ハ其事を行ひて災異を却くる終ふればあり
用明天皇二年御紀ハ厭字をも麻自那比と訓ふ又
傍ハ登古布と有り宿紀中は詛を登古布と訓ふ
ハ處追ふトニカフ又咒詛を伽辞離と注せるハ頭後あり

あり可く又咒を誂をも能呂布と訓るハ宣追あり
可く所思ゆふ就て考ふふ古事記ハ天若日子或
有邪心者天若日子於此矢麻賀禮と有る同ト事を
此天孫降臨章第一書ハ時天神見其矢曰略咒之
曰若以惡心射者則天孫必當遭害若以平心射者則
當無恙と有て麻賀禮を當遭害と云換て當無恙と云
言の反と為り然して此當遭害ハ御門祭詞ハ天能麻
我都比登云神ハ言武惡事ハ相麻自許利相口會事無
以道饗祭詞ハ鹿備踈備來物ハ相率相口會事無と
有る麻自許利と同言ふルハ次ふる率字と同ト義也

て常ニ交ハリ交ハると云々等一きと思ふ然
ず其ハ身繫の言ハ波理の辞の添ハるふルハ右の麻
自許理此の麻自那比の麻自ハ其ハ異なり此等の
麻自ハ身退の言ハて此を麻自許利と云時ハ身退
マて万葉ニ謂ゆる高自許理ふとの例あり又麻自那
比と云時ハ身退神と義あり大祓詞の蓋物を麻自母能と云ハ
麻自和邪と云為り麻自和邪と云ハ麻自和邪と云ハ
死ぬ可き業共を為させしめ其麻自和邪と云ハ
陰陽師の云くまゝと有り

自の自を志自の切れりありと見るハ
神武天皇

△名教抄ニ麻を麻
自和邪と有るは
麻自即本語より
さを知べ

△水鏡中ハ守屋愈怒を成て兵士を擧ぐ様守屋那比
麻自和邪と云為り麻自和邪と云ハ麻自和邪と云ハ
死ぬ可き業共を為させしめ其麻自和邪と云ハ
陰陽師の云くまゝと有り

あり可く又呪を誂も能呂布と訓るハ宣追あり
可く祈思ゆるを就て考ふるハ古事記ハ天若日子或
有邪心者天若日子於此天麻賀禮と有る同ト事を
此天孫降臨章第一書ハ時天神見其矢曰略咒之
曰若以悪心射者則天稚彦必當遭害若以平心射者則
當無恙と有て麻賀禮を當遭害と云換て當無恙と云
言の反と為り然して此當遭害ハ御門祭詞ハ天能麻
我都比登云神ハ言武悪事ハ相麻自許利相口會事無
以道饗祭詞ハ鹿備踈備來物ハ相率相口會事無と
有る麻自許利と同言ふルハ次ふる樂字と同ト義也

て常ニ交ハリ交ハると云々等一と云ふと思ふ然
す其ハ身繫の言ハ波理の辞の添れふふれハ右の麻
自許理此の麻自那比の麻自其ハ異なり此等の
麻自ハ身退の言もて此を麻自許利と云時ハ身退
マて万葉ニ謂ゆる高自許理ふどの例あり又麻自那
比と云時ハ身退神と義あり麻ハ此方の身を云ひ自
那比ハ字豆那比
自の自を志自の切れふありと見らハ
神武天皇

△名我抄ニ麻を麻
自和那と有とて
麻自即本語あり

戊午年御紀に樓違不知其所改涉並仁天皇五年御紀
 十一則以懼一則以悲俯仰喉咽進退而血泣ふとも有
 る志自麻比ハ編字の義にて源氏末痛花下十七何十
 度君が志自麻比負ぬむ物勿言ると云ぬ頼こも又
 二十何事と云れ給はず我さへ口開たる心ち為給へ
 ど例の志自麻比試むとふとの志自麻比亦右子同
 しく猶若紫仁子人の禁厭ハ煩ひしを即止むる類數
 多侍りき志自許良加志つる時ハ轉侍りてと有も為
 損ふ事を云ふれば其義違ハず然る時ハ麻自ハ真退
 りて先ず災異の物を却けて其故を違やしく為さ

煩ひを登行年
 流

即火鎮藥の始長
 あり又下引花
 鎮藥の起此大神
 子巳子始れらと
 禁厭と療病と巳
 上古より相並ひ行
 かう事と其禁
 厭の二方即療病法
 と成り療病法即
 禁厭と成り者
 又

る今る謂ふ事灼然き者あり然れハ麻自那比
 年流ハ令息あり此禁厭を麻自那比夜年流と訓い
 事允子其謂ハ有る者ありけり其若紫卷子癩病子煩
 りい給ひて万麻自那比加持ふ為さ給へと煩
 多くて數度發り給うけり或人北山子ふむ何某の
 寺と云所ハ賢き行ひ人侍り云年の夏と世起りて
 人ハ麻自那比類數多侍り云と所見たり
 此登抑年流即此の夜年流と同一事にて上二百十六
 下の細書子引る流記第五十八詔ハ伊都之河病止
 と有が如く病の治る事を夜年と云と共子同一事
 り名義改子禁字を麻自那布又須麻布又登抑年又佐
 麻多具又年又夜年又伊佐年又伊那夫と訓之厭字
 を布佐具と加那布と阿久と麻自和邪とも甲
 登布と志用多具とも諸禁厭の法ハ上二百小
 於佐布と訓たり
 己子註るが如く二柱御祖神子始れ事にて彼鎮
 火祭ハ伴井冊尊の火神を坐坐御時子出来り道饗

祭ハ伊弉諾尊の黄泉軍ニ追及れさせ御在り坐けり
時子起り大被ハ其大神の菰紫日向の橘小戸よりて
事始めさせ給へり御政あり又蛇比禮吳公共蜂比
禮ハ須勢理毘賣命天上より傳へさせ御在り坐て此
より始て行給へり御事ふり其ハ天神本紀子饒速
日命の天降給ふ御事を書せり中子天神御祖詔授天
璽瑞寶十種謂羸都鏡一邊都鏡一八握劍一生玉一死
及玉一足玉一道及玉一蛇比禮一蜂比禮一品物比禮
一是也天神御祖教詔曰若有痛處者令茲十宝謂一二
三四五六七八九十而布瑠部申良とい止布瑠部如此

為之者死人及生矣是則所謂布瑠之言本矣と所見也
此ハ古事記白檮原宮段に故尔近藝速日命參赴白
於天神御子聞天神御子天降坐故追參降来即獻天津
瑞以仕奉也と有る此御事あり右ハ天神御祖に有
ハ天照太神高皇產靈尊神皇產靈尊三柱より渡りせ
給ふ御事此の天孫降臨章を考て知べし然して天孫
本紀子神武天皇即位元年ハ御事を注せり宇摩志
麻治命十一月丙子朔庚寅初齋瑞宝奉為帝后鎮祭御
魂祈壽祚其鎮魂之祭自此而始矣と見えたり如
く鎮魂祭の起是あり然るを古語拾遺に凡鎮魂之儀

者天鈿女命遺跡と云事の所見なるは十種神宝
も右の如く饒速日命より傳はり鎮魂歌の一二三四
五六七八九十と云ハ天鈿女命の彼日神を招奉ら
ける磐戸開の御時を始れり業ある事傳十九
の注るが如し然る時ハ此鎮魂祭ハ一七已子皇祖天
神の行定めさせ給へる御事にて高天原より傳ハレ
る禁厭（ハ）事申すも更あり清原宣賢卿説ハ十種神
申されたり人の痛む所有る時禁厭（ハ）様あり此病
を治する一の道ありと云れたりハ実ハ卓見あり此
説ハ據るルけりや谷川翁も此を禁厭の中より此
祭を主と為る由云るハ又上二二百（ハ）引て云る如く
實ハ然る言ふる者あり

備後風土記ハ蘇民且且の事を記して即速須佐能雄
能神也後世ハ疫氣在者汝蘇民將來之子孫ハ云天以
第輪著腰上詔隨詔令著即在家人者將免止詔支と有
ハ太神宮行事記ハ謂ゆる輪越神事の本あり公事根
源六月大被條ハ此大被ハ百官一同ハ集りて被を為
ふり又今日ハ家々ハ輪を越る事有り六月の名越被
為る人ハ千歳の命延と云ふり行事記云此歌を唱ふ
ると甲傳へ侍る下と有て朝廷よりハ各集りて解
除を為し其人々も家々よりハ私ハ輪越神事を行ふ
と由あり此歌ハ古今六帖ハ載たり詠人不知の歌ふ

れども解除を物して鈴を延べき由云るハ其疫鬼を
祓ひ和あは 驗有を云ふハ其頭書引れたる園大曆
延文二年卷ノ名越と云ハ和むと云心ハ鬼を祓和む
るありと有る右の風工記ハ考ふ可く又 大祓詞ノ奉
たる白人胡久美の如きハ難疾の甚トき者ありと雖
も其驗ハ依て念え又昆虫乃災高津神乃災高津鳥乃
災畜作志志 蓋物為罪不しの如き甚しキ殃し亦其切
を得て除ころ申あり然れば右の名越を知むと云説
實ハ其謂有と云べし然るハ空總祭使卷ノ逢事の那
基理の故為つる哉大幣ありハ人を見しと云と有ハ

餘波の意よて其本義ハ非る内ハ但解除と輪越と
其始同トうずれば此を一ハ交 行ふハ中言より
の事トハ所見九れども若共子疫鬼を攘ハ行事ありと
以て解除の序ヲ行へるハ其便理ハ隨ハて終ハハ一
物の如く成ハらありけり故此輪越神事將上件の禁
厭ハの属ハある事を知ハべき者あり但此ハ素戔嗚尊の事
御事ハ一有けれハ天上ハにて千座置戸の解除ハ遇ハせ
て所ハ在ハ一坐け其天津宮事ハハ倣ハひて行給ハハ御
政ハあり事申すも更ハあり第ハの然ハる神草あり事ハ傳ハ十
九卷三百四十七下第纏之ハ稍ハの下ハ云ハい又被ハ具ハ用
ふ事ハ其五百七十大下然ハして古語拾遺ハ昔往ハハ
云ハ事ハ共ハを考合ハす可ハ然ハして古語拾遺ハ昔往ハハ
神代大地主神營田之日以牛完食田人于時御歲神之

子至于其田墮饗而遂以狀告父御歲神矣怒以墮放其
田苗葉忽枯損似篠竹於是大地主神令^志正^止鳥^正
今俗竈輪占^占求其由御歲神為崇空^獻白猪白馬白雞以
及米占也解其怒依教奉謝御歲神答曰實吾意也宜以麻柄作持
持之乃以其葉掃之以天押草押之以烏扇扇之若如此
不出去者宜以牛穴置溝口作男豈形以加之^{所以厭以}
蓋子蜀椒吳挑葉及鹽斑置其畔^{古語以蓋}仍從其教苗
葉復茂年穀豐稔是今神祇官以白猪白馬白雞祭御歲
神之緣也之所見乃此故事ハ已^傳廿六^百二十^下
委^一証^二せるを此^三ハ其禁厭の事^四因^五て復説を

成す者^一有り備右^二ハ所以厭^三其^四ハ注^五ハル又私記^六ハ七
昆虫之災異を問此等 災異為何哉答此等之類甚多
近則蝗虫害苗之類と有ハ此事を禁厭の部ハ數すハ
くれたり^一者あり若て白猪白馬白雞を以て此^二ハ其
御歲神の怒を和の奉給ひ^三ハ謂^四ハル祈年祭の基^五
て後ハ天孫降臨より以來國家の大事^六ハ物為^七させ給
ふ大御政の始是^八あり又其神の教^九ハ依^十て 上^二百^四
十一^丁
ハ注^三ハル如く持を以て持^四ぎ麻葉を以て掃^五ひ天押草
を以て押^六ハ烏扇を以て扇^七ぐハ其苗を振動^八ハして墮
を出去^九ハむ術^十めて此^{十一}ハ攘^{十二}と云^{十三}る是^{十四}あり若てハ猶

出さざりし時ハ牛共を以て田溝口ニ置り以下ハ其
 蝗を殺す術あり次子男壘形を置く事ハ下ノ所以厭
 其意也と有て此事ニ係ルヲ注ふるを以思ふ此ハ
 其崇り坐す神の御心を和み奉りて蝗を令去らる
 けり次ハ有る意子以下の物ハ虫ニ害有て苗ニ利有ら
 物ある可き事下ハ苗葉復茂年穀豊稔と有る引合せ
 て見ら可き者あり此一ハ等ノ状を以て祭と被と
 二共ニ相行ひて共ニ禁厭ふる事をおい知べりけ
 る猶蝗を令去る術此外ニ有べり其一二を云ハ
 丁六卷百二十七下不ト注せり如く神名式ニ
 見えたる出羽國飽海郡大物忌神社名神大ハ一ノ所

の川傍

小南ハ山ニ其子
 抱いす又

祭保後神ニ渡りて給ひて謂ゆ縮倉嶽ノ御在
 坐す世ニ鳥海山と云是あり其山頂ニ蝗穴と云て大
 あり巖ニ蜂巣の如く穴有て其ハ蝗穴多ク住居
 するを何時ト人の登らハ六月七月頃多ク山上
 ハ猶白雪の中よりけりハ蝗の所を得て聚り居る事
 ありガ其穴ニ蝗の多キ年ハ里々ク少キ年ハ國中
 大ニ害有るを謂ハ人毎々ハ小ハ紙を裂て唾以て粘
 事ふるハ其粘主の田ニ限りて蝗の害ナキ事トて実
 切驗有る事能く人の知ル所なり又周防國都濃郡
 夜地村ト云有り其南方ニ山ト云有り古ニ謂ゆ
 都怒國造の館舎の証ニ對ハる名あり此麓ハ河内
 明神ト云ニ杜有り大なる松一株を神体と為て別
 社ト云ハ其子を此ニ奇異ふる事ハ此松の所在大抵
 ハ村半の程ニ官帳を五年五月六月の頃ニ至りて
 蝗の害不ト牙才事の有ルハ必松葉悉くハ黄バにて
 恰ハ枯木の如く成るを東枝のニ不ルハ村より東
 蝗の害有り西枝あり時ハ其より西ニ蝗有リ北方
 一在る時ハ其北の田ニ害有り乍ハ黄バハ其時ハ村中
 あり近郊の人其方位を伺ひて豫ニ神ヲ祈申して蝗

三つと其年の聖一
山を平一給い聖
ノ多クの事と其
方々就令知給
又其祈と成し時
次つて若明と
御在し坐を以て
神告林と申奉る

二法路の仁井と云

の害を除くし事を祈るは果して驗有る時其方の
枝忽本の如く成り否と云ふは秋收る頃迄其任
して獲る者無と云ふ依て人皆恐ること敬ひて家毎に祈
る者安政五年と二度の宗像詣り予と親しく見たり事
り其戸田村人山田豊頼其河内明神と申すは何
の神と聞かば予答云るは越後國磐船郡出羽國田川
郡河内明神と申すは社所は河内國石川郡建水
分あり申すは故考るは神名式に河内國石川郡建水
分神所在し坐せしに其神を勧請し皇神等能寄志奉年與
都御年平八束徳能伊加志徳尔寄志奉者と有を以て
其神の守りせ給ふ所以を知べしと云ふは人の悦び
詔ふはぬ備又予か奉生のこころは古の崇道天皇の
御陵山に今も天王社と申す有て實は其御霊を祀る
社ふるを後祇園神を合せ奉と云て稲穀の事なり
決めて幸ひ多在り年毎に六月七日に出送て云事を
成すは村中の蝗を藁ふぐり採取て此を撥の如く
束ねて青竹の著て大敷鉦を叩きて或石原の御嶺
の虫は然供すと高く云連て隣村ふる或石原に送り

却ふに神事の後に決めて其害とある事と不備右
の冥守殿と云ひ稲を守給ふ神なりや右等の事共
ハ何れも禁厭の類なり此等の事尋常右に云ふ如く
求たりむは諸國の様なる可し備右に云ふ如く
道徳祭ハ一も伊弉諾大神に始れり御事ありけり
此天孫降臨章々大己貴神の乃以平國時所救之廣茅
投二神曰吾以此茅率有治切天孫若用此茅治國者必
當平安と有ハ其神体を投奉らるあり其第二書に
乃薦岐神於二神曰是當代我而奉從也云々以岐神為
鄉導周流削平有逆命者即加斬戮歸順者仍加褒美と
有ハ其廣茅を正体と為給ふ神の正身を申すよて此
ハ深き所以有る事傳十
二百五
十二丁
注るが如し此御

○日本書紀傳二十九
○二百五十

即四時各式道
御祭於京城
之神祇令道
余義解諸下都
寺於京城四隅
而幸之言欲令
登自外來者不
入京師故預御
於道而食居也
と所見なる是
と其心を知る

△たゞ春新清和天皇御銀馬障神祭と有ふと皆道饗祭上
是月京邑咳逆二病發死之者衆以關神湯海落來饗時祭式子所
毒氣之令然馬是日長夜建祀門前以厭之と有は是を
以て果送神を厭せ給ふ事歎む在存是法有るを知らず神事不
也

政を天上子聞え奉るせ給ひけり子天孫降臨の御時
より更子天神の御命以て授奉るせ給ひけり故に高天
之原亦事始皇御孫之命止猶倅竟奉云と其詞と
所見乃多是あり臨時祭式之宮城四隅疫神祭又ハ
幾内塚十處疫神祭と有ハ更ふり又唐客入京路次神
祭云右蕃客入朝迎畿内塚祭却送神其客徒等比
至京城給被麻令除乃入と見え又障神祭云右客等

り由委しくハ傳十二二十五子江をりて見て知べき不
り惜又十二月晦の追儺比亦其一種ありける者あり
其ハ中務省式子九年終行儺儀有て此儀式了出たり陰陽寮官人率齋
即等候承明門外以挑弓葦矢挑杖頒克儺人云と訖陰
陽師進讀祭文其詞曰今年今日今時云々大宮内
亦神祇官宮主能伊波比奉軍敬奉天地能諸御神等
波平久於太比亦伊麻佐布倍志登申事別天詔久穢久
悪伎疫鬼能所と村と亦藏匿隱布留千里之外四方之
塚東方陸奥西方遠直嘉南方土左北方佐渡余平知能
所平奈平多知疫鬼之任加登定賜比行賜は五色宝物

即四時分式之道
御祭宗於京城と有
て神祇令道祭
宗義解請下都
寺於京城四隅道
而祭之云欲令鬼
魅自外來者不致
入京師故預御
於道而祭也
と所見なる事
と其心之類一

政を天上子聞え奉るや給ひけり子天孫降臨の御時
より更子天神の御命以て授奉るや給ひけり故に高天
之原亦事始皇御孫之命止猶辞竟奉云と其詞
所見なる是あり臨時祭式謂宮城四隅疫神祭又ハ
幾内塚十處疫神祭と有ハ更あり又唐客入迎路次神
祭云右蕃客入朝迎畿内塚祭却送神其客徒等比
至京城給被麻令除乃入と見え又障神祭云右客等
入京前二日京城四隅為障神祭と有ふと皆道饗祭よ
り出又祝詞式遷却崇神詞と有ハ臨時祭式子所
見なる霽靈神祭の事よて其心此より出たる神事不

り由委とくハ傳十二一五子一をを見て知べき不
り惜又十二月晦の追儺大春の牛祭其一種ありける者あり
其ハ中務省式子九年終行儺儀有て此儀式子出たるが事陰陽寮官人率齋
即等候承明門外以挑弓葦矢桃杖頒充儺人云と訖陰
陽師進讀祭文其詞曰今年今日今時云々大宮内
亦神祇官官主能伊波比奉軍敬奉留天地能諸御神等
波平久於太比亦伊麻佐布倍志登申事別天詔久穢久
悪伎疫鬼能所と村と亦藏星隱布留千里之外四方之
塚東方陸奥西方遠直嘉南方土左北方佐渡余平知能
所平奈平多知疫鬼之住加登定賜比行賜は五色宝物

海山能種之味物乎給良罷賜移賜布所之方ニ尔急示
罷往登追給尔挾肝心良留里加久良大儼公小儼公持
五兵追走刑殺登曾詔訖云持挑之葦天挑枝碎瓦云
ニ駢宮中出自十二門付京職と有ハ彼伊弉諾大神の
挑枝を投て雷等退給ひし御事より出たり一者ニ
て道郷祭と屬たる事乃て其所作に全く禁獻する者傳十二
三十三下子己明
くめたり但此詞の我が古文の本あり有つるが上
を言共の打交りて如何ある事と有れども金條の古意
をハ失ハざる者あり鴨長明四季物語に
追儼の夜ハ木餅鶴鳥ふど焼奉り御餉の御廻り奉り
ハ是も物怪疫病却ひぬ可き本文侍るとふ心願ハ授
物終り方ハ儼追ふ家ハ百敷多ハ有る事なり此儼
と殊大内ハ掃部寮候として仕奉り此儼

若く右の於て
就て考うふ

追ふ事唐より侍れど別て我御國ハ神武天皇の
六年の春ハ物為給ふ御事ハ御例より於
ハ我神社或ハ御菩薩池の邊より奉り事定りたり故
實とありしと所見たり傳廿三卷三百二十九下注
ガ如く下鴨御祖社の攝神ハ比良水社と申す御在
坐て所祭素戔鳴大神ハ本朝月令に見えたり如く元来下
事有ハ其秦忌寸ハ本朝月令に見えたり如く元来下
上兩社ハ仕奉りハ疫鬼を却いで給ふ可き料あり可
を奉りハ賀茂ハ終ふ又傳廿六ハ下子大倭神社注
所由有ハ神物ありけり又傳廿六ハ下子大倭神社注
進状ハ傳聞國神者大己貴命之和魂大物主神也韓神
者大己貴命少彦名命也と所見たり是正説めて其本
社ハ神名式ハ謂ゆ大和國城上郡大神大物主神社
名神大月次ハ有る是よて其所祭ハ大三輪三社鎮座
相嘗新嘗

日本書紀傳二十九
〇二百五十二

大同類聚方丈惠
耶美云神條花
鎮藥大倭國城上
郡大神大物主神社
二所傳之方世惠耶
尾初給輕文重紀
年以波受甲并五
驗空流久須利乃方
鑽玖羅乃羊那
母毛之伽波分有て
是疫癘の神葉乃
事上古の神事ハ
今日の人事ハ驗有
多事甚妙乃者
ありり又十八卷向
之氏逆安當利也
屏葉云魚仁當利
多流者二月倍古久
寸飲即森在久累政
耶志累毛母奴波耶
研三日湯仁用子倍
之と有て此も櫻こ
机を用う事あり

次第ニ奥津磐座大物主命申津磐座大已貴命邊津磐
座少彦名命と有て實ニ天下ニ在リ國韓神社の根
源是あり又同式ニ同郡狹井坐大神荒魂神社此を大
倭神社注進狀ニ傳聞狹井神者大已貴命之荒魂大國
魂神即當社別社也と所見ナリニ神祇令季春鎮火
祭義解ニ謂大神狹井二祭也在春花^華飛散之時疫神分
散而行屬為其鎮遏必有此祭故曰鎮華と有也又四時祭
式三月祭ニ鎮華祭二座大神社一座狹井社一座と見
え^{て印}此二社ニ就て祭る御事あり備此
鎮華祭の根源を思ふ傳九^百十二^九十^九注るが

如く四社出生章第五一書ニ伊蘇冊傳略故莽於紀伊
國熊野之有馬打焉土俗祭此神之魂者花時亦以花祭
又用鼓吹幡旗歌舞而祭矣と有る是始あり此大神
ハ一ニ謂ゆる豫母都大神ニ渡らせ給へルバ根國底
國ニ在リ疫神ハ其御掟ニ從奉る事ありを以て
此大神の祭を成て疫癘を止むるあり可一其ハ神名
式ニ攝津國有馬郡有間神社ニ有る風土記ニ所祭大
已貴并少彦名神也と見えたり其社邊ニ碓^{ケチハ}場^ハ村^{ナリ}と
云有ハ古ニ花鎮場^{ケチハ}ありと云ふ甚能合ニ事ふルハ
此鎮華祭と云事ハ右の二社神の行定給へるあり

〇知べり、此御社の御事、攝陽群談、湯山ハ式、
 有間社より所祭三座熊野三輪鹿古神より鹿古神ハ
 有馬郡香下村羽束山香下寺の本尊にて救世觀音の
 垂跡少以彦名命より有を以て右の熊野之有馬村の
 由有る事を知べし概津志に有間神社在中村属邑西
 尾今稱山王近隣七村所祭村民平日忌穢婦人産期出
 就水涯分婉未嘗有産死者と有てし伊井丹尊の御
 靈ふる事知る右の鎮葦祭と云ひ産婦の水涯に就
 と云事ふど皆禁厭の一ふる者あり又上百七十一丁
百八十七丁
 武藏國御嶽山の事を云る武藏土記に所祭大己貴

命也安閑天皇乙卯始奠官社花時以花祭之新稻之時
 以新稻祭之と有る其名ハ出さざれども事實を以て
 推す時ハ例の鎮葦祭より事云も更あり其外ハ花
鎮祠として國
こゝ在り山城志葛野郡松尾神社の下に祠官三十三
家其十家謂之社司轉任社務其餘称宜祝二十三家謂
之神方預花鎮祠と云ひ也訓郡久何神社の下に在
下久我村今稻荷明神又有花鎮宮在上久我村と書
又撰津志に花鎮神社在河邊郡安倉村と有ふどを以
て思及不す諸國の中は猶歎る社ふむ多かりぬ可
き事ふ又傳十二六丁に注るが如く紫野今宮ハ一も
りける
 園韓神にて渡り給ふ事即大倭神社注進狀に紫野
 今宮三社社家者流如右と有て灼然より小野宮
 年中行事に載る外記日記に號岐神又稱御靈と書

〇又上百七十一丁注る
 武藏國土記に所祭
 鹿古神ハ式
 神の事ハ注る
 所祭大己貴命也
 花時以花祭之
 鎮祠として國
 〇日本書紀傳二十九
 〇二百五十四

此紀略ハ於紫野祭疫神號御靈會依天下疾疫也
と見え（此四季物語に紫野の根國の神社と有り是より謂ゆる障神の御事あり）春記永承七年（五月十八日壬午天晴近曾西
京住人夢稱神人之者來云吾是唐朝神也無住所來此
國已無所據吾所到悉以發疫病若祭吾攝作住其所
者可留病患也略世号今宮と有る此唐朝神ハ韓神の
御事あり可きを夢想の人の思違へたり（此等と
合せ考れば今宮三社ハ國韓神を二座とし疫神を一
座と為て祭るるあり可し備此社ハ三月十日夜須
禮祭と云有て社家ハ其を鎮花祭とし（夜須
ハ全く右ヲ注せる鎮華祭と同日御事ありけり其委

しき状ハ四季物語（三月條）に紫野の根國の神社ハ花を奉り
其日ハ少納言并子主鈴ふと参りて疫神ハ封を奉り
看督長教を懸ふと神祇官を懲し物す安る（果よ安
る（果よ）と數説ひて花を手折て官の男等ハ傳ふ事
あり此事後一條院の頃間より始るル（とふ）安る
果よとハ春の氣ハ上一人より下末まで當るせ
給らず下よも煩るるで安る（果よ）の事あり可
し若キ官人歸れば百敷の内を行交ふ人御格子の内
より其花賜べむ物の代り奉るむあど幼きハ官人の
袖ハ取著る奪取ぬ悪く（と）も云て却ひ遣ぬる事也

然すが石木ありぬ人の心哀れや略と所見たり
此を以て上件の大神狹井二社にて被行る鎮華祭の
趣をし思致る可き者あり己子傳十二卷七十丁
月十日の夜須礼花の園韓神ふ就たり御祭ありけれ
に其本社と御在し坐す大神社より移して行ふ者不
ろ可く又次に云ふ五月九日の御靈會ハ疫神に就た
る祭にて起れるありむを共に同社の神に坐せば彼
此を分ち奉る者あり備其御靈會と云事ハし紀略に正曆
五年六月廿七日丁未為疫神修御靈會木工寮修理職
造神輿二基安置北野船岡山屈僧令行仁王經之講説
城中之人招伶人奏音樂都人士女齋持幣帛不知幾千
萬人禮送難波海此非朝議起自卷説と有ハ未今宮

の御社の定ありざり程の事にて神輿を造りて舩
岡山ふて疫神を被祭たりけりか四時祭式道饗祭の
下に於京城四隅祭と有を思ふふ加岡ハ凡西北隅ふ
當る可き地ありければ其饗土アハトあり一所の園あり義
あり可一備此ハ神輿を安置て都人士女の幣帛を捧
持て祀れるに招伶人奏音樂と云ハ此ハ右二百五
注る鎮華祭と本ハ一ありけりふて伊弉冉尊の御魂
を祭るふ用鼓吹幡旗歌舞而祭矣と有る其事を此ふ
被用るふふめり然して此を難波海に送る事ハ神
祇令道饗祭義解預迎於路饗過と有る其事を甚しく

物為るありけり後今宮の御社定りて後の御霊會ハ難
 波海に送るるガルル神輿を振る意味ハ獨其神をし
 て疫鬼を却らせ奉る義あり公事根源五月條紫野
 今宮祭九之有て恒例の神事あり由己傳十二
八丁之季一く注せれば就て見べし又此より以前己
己清和天皇實錄子貞觀五年五月廿日於神泉苑修御
 靈會云毎年至夏天秋節修御靈會往不斷云事有れ
 ば彼道郷祭より移して古く行來る者ありけり儲又
 傳十二七十丁子注せり世子名高き祇園御靈會の事ハ
 一も其中間素戔嗚尊西間ハ稻田姫命東間ハ八王子

即疫神の御事あり又ハ蛇毒 氣神と申せり是ハ
 大同類聚方子疫癘の事を阿之みと云る其言の有を
 彼ハ岐大蛇の事子合せて然る忌ハ子字を作る子
 ころ有けれ其実ハ謂ゆる疫神の御事と岐神の御
 事を指る者ありけり故此御靈會ハ右の今宮の例の
 如く專疫神の御為ニ行ヒ初ナ多ク神事あり事著明キ
 者ありけり此亦神事ト雖も其始疫神を祀りて疫
 鬼を却ス所作を成ス起りたりけれバ全く禁厭の
 決メて大ス者ありト非ズ但御靈會ト云稱ハ神
 所謂御靈者崇道天皇伊豫親王藤原夫人及觀察使攝
 逸勢文屋宮田丸等也並坐事被誅冤魂成癘近代以來疫

〇四季物語
〇右の三代實錄の
文を引て
〇四季物語
〇右の三代實錄の
文を引て
〇四季物語
〇右の三代實錄の
文を引て

病死に甚衆天下以為此災御靈之所生也今茲春初咳
逆疫百姓多斃朝廷為祈至是修此會以賽宿禰と有
如く其始ハ怨念の祟を鎮めさせ給ふに若し
然る怨鬼の輩ハ彼疫神を奉りて其御座を仰ぎ
奉る者より由傳十二卷七
十七下ヲ注を考ハバ又其園韓神の御事ヲ就て
四季物語六月條ハ嘉祥の御祝ハ平城の御門の大同
の頃間より年々より又ハ隔年より成し給ひぬ陽氣
繁く人の精神を沈む許り熟き時柄ふれば夕名彦園
韓神ハ疫病を掌どらせ給へば此ハ御酒を奉らせ餅
を千づうと備へさせ給て天長地久四民安樂を祈
せ給ふ事より然るに明天皇の養和十四年の
頃二神御告御在りて六月十六日ハ疫病の勢ハ人の

肌膚に入て惱を成べし十六日の敷比へて餅十六
或ハ菓も其敷に調へ百取の札物を營ミ祭らる可
然らずハ主上の御身上況て下方ハ重き悩有べし
物為給ひしより愛たき御事とて改元有り嘉祥と改
めさせ御在りて六月十六日ハ其事營ませ給ふ其
年民安く國饒ふれば此事を勤めての年ハ猶又行ハ
せ給ふ事あり可し大元後ハ嘉祥の祭と云り略下
所見たり歌林四季物語ハ仁明天皇養和の頃始ま
ると云り但右ハ夕彦名國韓神ハ有る事ハ此神ハ
も上二百五
十二丁
よし云ら如く大元貴命夕彦名命二神を

合せて韓神にて渡りて給へルバ重複し似たりと雖も
も風上記にも多く此文法の有を見れば此ハ其中の
も夕彦名命を主と為て云時の文法なりと聞えたり
是又禁厭の事の祝事之成れる者なり
此ハ今も事世
も行ふ事にて
有れども其来申延喜式江次第公事振源ふどし所見
無きを其珍しき事なり其下文に斯やりの祭ハ素
多鳴の眷属の神を祭る事なり即事節つけき御眷属斯
る山住を訪れずともて閑刺て老くくを過さむと
と身の述懐
を添て云り又伊勢風土記に員辨郡井上神社坐田十
七束三畝三字田孝謙天皇四年所祭園韓神夕彦名神
也土地有疾疫則来此社神前掛長繩垂白木綿祈其疾
疫其効驗不廻頭也と所見たりハ人毎に為り所作と

聞えて其し一の禁厭にて有るは又駿河風土記に
安辨郡穀神社廣野姫天皇三年戊戌所祭少彦名園韓
神也と所見たり此社号に就て考有り右に引る四季
物語夜須禮祭に疫神に封を奉り看督長穀を懸ふ
て云くと見え又徒然草に主上の御惱大抵世中の騒
がしき時ハ五條天神に穀を懸る云々と云ひ又山
城名跡志鞍馬寺條に由木社在樓門内三町所祭大已
貴命座一神位正一位天子不預世上騒動の時穀を此社
に懸る故に穀と号するありと云り神社考詳節に五
條天神天子不豫或世上物怨之時懸穀于此神前又鞍

沙、大、神、訪、因
鎮座記、伊、野、國、由
貴、殿、女、彦、名、命、に
有、を、以、て、其、大、已
貴、女、彦、名、兩、神、を
祀、ル、事、を、知、ル、

馬有穀明神者是所被掛穀之神也者督長所負之穀掛
于其家則人不出入勅勅之所必懸穀為法之有以愚ふ
る説あり天下に疾疫の行はるとして何不此神をして
勅勅の例にハ入るれむ四時祭式祈年祭も然る可
き神にハ穀幣帛添て一口を奉るる事有れば此全く疫を
攘ふ御祈の禮代と為て必奉るるを以て穀を以
て其社より号奉れり者あり皆其五條天神ハ式外と
雖も止事無き御社にあり渡らせ給へりけり其本縁
と云物に桓武天皇延暦年中に詔御在り坐て王都長
久兵草靜謐の鎮衛と宗の給ひ万民豐饒攘災除疫米

穀成熟の守護神と齋敬い奉給ひてより以来主上の
御惱或ハ世中騒がしき時ハ勅使を下され穀を神前
に懸奉りて其災厄を攘ひ其物念を鎮め給ひ又毎年
の節分ハ人皆此宮に詣で、神木小餅を受て一歳の
疫疾を攘ひ軍陣并は出行の首途を祝ふ是太古より
遺れる法あり略と云ひ又神社考小祭神を少彥名命
と書して案少彥名命者高皇產靈尊之子也即是五條
天神也今毎年節分人皆詣此社取餅及白木為除疾病
也蓋神代之遺風耶と有る是亦疫疾を除く禁歳あり
可す云す也也更もありあり右ももも引りるる四季物語追難の夜ハ木

餅鶉モトウシ餅鳥トトリふと焼奉りて御餉の御廻り奉ルハ此物
怪疫病瘰ひぬ可侍き本文侍とありと有る其本文今傳
ハるがれハ何ふ據と云事知るれざれども其白木ハ
天武天皇十四年御紀冬十月癸酉朔庚戌遺百濟僧
法藏優婆塞益田金鍾於美濃令煎白木と有て十一月
癸卯朔丙寅法藏法師金鍾獻白木煎是日為天皇招魂
之と見えたるを通證子ハ良蓋招禱之義故招魂日獻
之也と有ハ然る説よて実子此物子然る招魂の神切
有を以令獻給へる子けり凡凡人の精神能く其一身子
充滿ミナミつ時ハ氣血の猶還其常を錯失へず此を以此白木て自然

小邪祟を攘ひ疫癘を除可けり可禁厭可ハ成可れ者可ふ可
右の鶉鳥の事を通證子鶉身至今上下為節物蓋取
詞身之義也と云れたる其も然然事事其並並ひ
たり白木子招魂の義有子上ハ鶉子其對子へ子義無
てハ有子る子然然ハ附子身子云子事子其魂子離子無
さる義子取子可子言子今集歌子咲子花子思子附子身子
味氣子不子身子勞子す子の子入子知子ず子有子ハ子二子句子鶉
を隠子して詠子り子聞子下子句子身子の子聲子を子云子就子て子此
物を然子禁厭子用子い子る子を子以子て子其子反子を子云子聞子心
り又神功皇后元年御紀子適子當子皇后子之子開子胎子皇后子則子取
石挿腰而祈之曰事竟還日産於茲土其石今在于伊都
縣道邊と有る此御事古事記子も故其政未竟之間其
懷妊臨産即為鎮御腹取石以纏御裳之腰而渡筑紫國
其御子者阿禮坐故號其御子生地謂宇美也亦所纏御

裳之石者在筑紫國伊計延佳本古訓本作村也之所見
九り是即産期を延ぶ禁厭ふ事ハ筑紫風土記子逸

都子郷食原有石兩顆一者長一尺二寸周一尺八寸一者

長一尺一寸周一尺八寸色白而便圓如磨成俗傳之息

長足比賣命欲伐新羅國軍之際懷娠漸動時取兩石

挿著裙腰遂襲新羅凱旋之日至芋涓野太子誕生有此

因緣曰芋涓野謂産為芋涓者 俗間婦人忽然娠動裙腰

著石獻令延時盖由此乎之有子之知了又筑前風土

記子怡土郡兒饗野在郡此野之西有白石二顆一顆長

寸太一尺重卅一斤一顆長サキニ一尺二寸太一尺重卅九斤曩者氣長足姫尊欲征伐新

羅到於此村御身有妊忽當誕生登時取此二顆石挿於

御腰祈曰朕欲西坂來著此野所姓皇子若此

神者凱旋之後誕生其可遂定其坂還來即産也所謂馨

曰天皇是也時人号其石曰皇子産石今訛謂兒饗石と

有ハ此と其同卜事と見えたり又万葉五十三子筑

前國怡土郡深江村子負原臨海丘上有二石略古老相

傳曰往昔息長足日女命征討新羅國之時取茲兩石

挿著御神之中以為鎮懐實是神所以行人敬拜此石乃

作歌曰下之七所見たり備神天皇御記子ハ生筑紫

之故田と有り然り時ハ故田ハ宇漕の古名なり今考

宇漕
也

今七深江より一里許陸方より山村片岸村の名有り
長野村の蚊田と云ふ田字も有り和名抄に謂ゆる大
野保長野奈加の二郷ハ古の蚊田の地にて今長野
村の宇美社と申す有り是不其宇添ふる可き備伊計
村ハ今池田村と云て志摩郡に属する所にて同所産
宮と申す有て其神体ハ白石にて撞圓ふるが其寸法
風土記に載るが如し故万葉集に伊計村を脱し古
事記にハ深江村を脱されたるよて其二方より別れ御
在し坐ありと云り其産宮の神前より一木の梅有り神
功皇后安産の祈願に韓地の梅を始て持帰して植させ給

ふと云傳たりとが以上土人説故其蚊田の地に就て思右
せざるに上語神名式に紀伊國名草郡加太神社今海士
郡に属して謂ゆる淡島神社是より社傳に神功皇后御
懐妊して三韓を平給ふ時武内宿祢命の妻嶺姫白布
六尺を捧げ御鏡の下へ御腹帯を締進らせ御出陣坐
こけり是腹帯の始あり御帰陣有て筑紫の蚊田にて
譽田皇子を産せ給ふ産婦の額帯ハ昔社より出る事ありと
云り其額帯を用いて胎を鎮むる事も一の禁厭と成
れり傳三十一類に注す可きと考合す可し又淡島社説に今世に例年三月三日九月九
日女子雛奈の遊戯有る事ハ往古神功皇后
年づらり少彦名命の御神像を作りて當社に奉納成
し給ひしより事起れり其後仁徳天皇の御宇神託に

六其韓地より
還らせ給へり
時小殖さ給へり
を彼より持渡
らせ給へり切
く誤傳たふ
て白皇國の上
より梅あり事
あり更ありを具
梅

因て天下の婦女切児の病苦を攘除くは為宇礼豆玖
物として雛形を製し此を觀たり給へり天恩と云ふ
と女考名命の御神像よりて此を祭る事
よ同ト子の為て云り以上社家の秘説あり源氏薄雲
卷明石姫君を迎給へり所は乳母女將とて貴あり
人むり御横切天児やうの物取て乗る云に注し天
児ハ今世の御婢子の類にて凶事を此より負するあり
此ハ三歳の姫君の車に乗る時の守物にて三歳迄ハ
皆持つ者ありと云り此も亦禁厭の方ふる事知べし
諸右の伊計村ふる産宮の社説は神功皇后安産の祈
願は韓地の梅を始て持歸りて植させ給へり申云傳
たふし思合せらる事有り其ハ神名式に山城國葛
野郡梅宮坐神四座並名神大月次新嘗に申す有て即古歌に謂
ゆり梅津里梅津川の地是るれば其梅宮の社説ハ此

梅津の桶に依て起れりありけり社説は酒解神を大
山祇神と一大若子神を瓊杵尊と一小若子神を彦
火と出見尊と一酒解子神を木花咲耶姫命と為て合
せて四座あり備神社啓蒙に社記并舊記曰件四社以
考謙帝天平宝字年中祭此地为帝基守護鎮守略其後
人皇五十二代嵯峨天皇始攝氏諱嘉智子略常以無太
子妻之不樂因茲皇后憑神代幽契祈酒解二座神矣一
且應感有妊孕遂以當宮清砂敷御座下居其上生児所
謂仁明天皇也是天皇追神惠略以為攝氏祖廟也至今尊
崇異化夏冬祭祀無怠耳世人望産月則必取當社砂佩

一室集葉隠れ
津波と見え
と云く子ハ宇美
成りけり我ニ有
と擇食して生産
幸を保たふり

帶襟此遺風也と有る神代出契とハ大山祇神の御女
木華^花閨耶姫命の無戸室に御在り坐て火を放ちつゝ
御子生給ひしうども平安に御在り坐けり御例を慕
奉らせ給へりあり今伊勢神宮の地より山神社に並び
て子安社と申す立せ給へり所祭木花閨耶姫命ふ
りと云も然る御事因て稱奉れりふり備姓婦の
梅宮の御上を賜りて帶襟に佩り事ハ梅と産と言ひ
相近きを以て故のこふらず梅に催生の功有を以
て殊に此御社に祈奉るをめぐり然れば神功皇后の安
産の御祈に神に梅樹を奉らせ給へりて是も亦禁

厭の一あり者あり甚怪しき物あり倭寛島物語と
催し有けり其催生果の事を云と云梅をも用意の
たり事と云ハ速無き作物あり世に在り習俗を
云る亦此の証と云べき事あり備子安社と申
すり猶諸國より多在る中ハ大和國吉野郡粟飯谷村
と云子安社有て其地の産土神にて有り殊に舊
社より其社に傳はり古記に木花閨耶姫命也と有
を予嘉永三戌年六月に詣奉りて其里正久保某の宅
にて見たり事有き己に三代実録に貞觀十八年七月
十一日授美濃國見安神從五位下と有を見れば古き
事ありけり百莖根と云物に不破郡赤坂山麓子安明
神神功皇后奉祭若宮社有り應神天皇奉祭と云ふ俗
に御孕御前と云ふ此社昔ハ赤坂南町に鎮座す云々
家綱公御誕生の時戸田左門氏鐵此社内の竹を以て
御産刀を獻ぜり安産を祈りて靈驗有り云々有
ハ天孫降臨章第三一書に以行刀截其子と有り思合
せりるハ愈木花閨耶姫命なり事決き者あり其神
功皇后應神天皇を奉祭と云ハ彼筑紫にて生坐す御
時ハ彼梅木を以て其神を児母神と為て祀給へり

又石の権生京の因
 云ふ大回瀬原方六十
 四卷尚礼分以味生
 餘て臨産四月兵不
 加河山之阿布比早
 中水二比天之神礼
 二波也カ用子流
 邊二十二年王流
 止其科の宮造奏
 之有ら此二葉草
 奏草の異名うが
 公事源源四月祭條
 うの賀茂祭う下子
 人、祭柱の髪と相
 ちり云こ有ら
 此事に依て奏祭と
 云ふ又御阿礼祭と
 云て其一子神事
 介の由とあり事
 上りも餘ら云ら如
 く禁厭即産祭と成
 小らうて斯ら類は
 事なり

事の傳りて然申
 すまぞ有べき
 偕大殿祭詞屋船久久遲命屋船豊宇
 氣姫命の下は是稻靈也俗詞宇賀能美多麻令世産屋
 以辟木束稻置於戸邊乃以米散屋中之類也と有ら大
 殿祭の行事の状を譬へたり一者にて四時祭式同祭
 條に入御殿忌部取玉懸殿四角御巫等散米酒切木綿
 殿内四角と有を注されたる者ふり偕此祭ハ一上
 二百二
 十五下
 子注るか如く大祓詞と一にて波府虫能禍無
 久又飛鳥カ禍無久と有ら本より鳥獸昆虫の災異
 を攘ふ禁厭を兼たる事云も更なる殊に産屋の事
 ハ無上く愛き事にてハ有らども其程の汚穢ハ又世

子譬へ無き迄はふ有けら辟木束稻をして戸
 外に置いて妖鬼をして其戸内に入ざらしむるにて此
 も亦禁厭なる者なり偕其辟木と云ハ傳十九五百
 廿六百十
 九下
 にも已に注るか如く世に云ふ祓串と云物
 の状たる物にて木を辟て麻を挟きたるにて不祥
 を攘ふ科なり束稻ハ散米なる事本よりあるが御産
 記部類に
 元永二年五月廿八日皇子誕生崇徳
 院同廿九日御浴殿右大臣女高倉殿持御劔典侍藤能
 子散米源礼又治承二年十二月十二日中宮御産氣此
 間内外周章當障子聲頻未二點皇子降誕安徳天皇
治美御産

記山と有ハ更ふり紫式部日記に上ハ渡りせ給ひて
御覽若宮御在ハ坐セバ糶米ウチマキ一罵る云々殿の公達
二所源々將雅通ふど糶米を投て尻高う打成むと単
ひ騒ぐ云々若君御誕生の後御湯殿の日米を打散す
事を云ふり見え女房故実録に御産所の事天兒守
刀糶米包ウチマキ犬管云々御歩ウチマキ候處へ糶米を散き候と
と有り右ハ御産屋の事ふり源氏横笛卷十四に若君
の寢寐ネミして泣給ふ御聲ウチマキ寢給ひぬ此君甚く泣給て
嘔吐ウチマキふど一給へハ乳婦ウチマキを差騷ウチマキぎ云々男君を寄り御
在して如何ありふふど宣ふ糶米散ウチマキしふどして乱が

ハ一き子夢の哀と混じりの可一略と有ハ幼ウチマキ子の夜
泣き散米を為て禁厭ウチマキ二事を云々て孟津抄ウチマキに幼子
の怖ウチマキゆり散米を為ふりて有る是あり但中古以来
辟木を用ふ事ハ絶え束稻をハ散米ハ換たり者
と所見ウチマキたうが又其辟木ハ今正月の饒ウチマキ子遺り束稻ハ
端出之繩ウチマキ子遺り事已ハ傳十九卷に注るが如ウチマキ然
を四季物語に漸ウチマキに御靈の冬も深く成行けバ云々ハ
幡ウチマキ松尾より饒竹奉のれハ矢背大原の民草端出之繩
遊ウチマキへて仕奉ルハ主殿寮細殿の司ふど今年ハ荒
ニ事ウチマキ勤めぬ汝等ハ身ハ浅ウチマキりりり可ウチマキハ云
事ウチマキ事ハ松ハ何時ウチマキも御生山より奉ルハ松竹を立
る事ウチマキ事ハ欽明の御世ウチマキに給へり松ハ千歳の齡
を有ち竹ハ緑の標を表ハ一節文を備へて礼ウチマキ子叶ハ
ハ年始ウチマキに仕奉るせ給へり云々と所見ウチマキたり但辟木

ハ其松竹を刺さる基と成る物ありて依て云ざれど
し如此云て即辟木の事とハ成れりあり此事ハ彼天
磐戸開の時始りて受き例ふるを欽明天皇の御世
ニ始れりと云ハ今京子の状を云ハ又ハ辟木の上
ニ松竹を挿○法ハ上二百十ニ注せら療病子於と云
子等一々此七大同類聚方子故嚴辛萬自奈比耶牟流
仁能里阿理と有ハ從ひて能理とハ訓べきふり皆此
法とハ右子舉たる共の如く其物子依り其事子隨ひ
て甚様こ多く有れども此を約むれば唯祭祀と解
除とのこのこ子て此法即禁厭の法ふり者あり大抵
醫藥ハ已子病有を療ハ禁厭ハ未其病セざる内子
行ニ事の如くふれども然のこハ非りけり彼大祓

詞ハ白人胡久美を舉たるを見よ此ハ世中子在と有
ゆる疾病の中子て最愈田可うとざる難病ありけ
れば藥を用ふとも如何ハ治る道の有む然るを此小
祓と云少就て心得べき事あり有ける此祓子依て然
る殘疾の極めて醜めく汚穢き者も其穢の除ころと
のこ思ふハ甚淺き一き説ありけり其祓を為行へる
驗ハ斯ら病患の除こり盡るまで至らずハ何を祓の
驗とハ云む古人ハ素朴子して真心あり故子唯祓
を為れば治る者と一途子心得て疑無りければ守
り神の御靈も一向子寄来て忽子病忘るまで至れり

實元又僧尼令一
九僧尼之療病者
皆遷俗其依佛法
時咒救疾不在禁
限之云々事の
曰東神天日乃字乃
如仁能比天朝乃言仁
佐良之保之天病者
乃傍仁向置其表
介羅根平火仁禁
言想身頭面背
暖手足平地流倍之大仁汗出流平奴其比天冷水平頭興利福支沐須陪之志可之天衣平厚久喜誓天

ふり然れど薬劑を用らる非水ハ又其功を取
事ふ難りの可き事ありけハ醫藥を以て主
禁厭を以て輔け相並び行ふふ即此二柱神の
療病と禁厭との方法を定めさせ御在坐ける御心
ハ相叶ふ可く職員令典藥寮と咒禁師二人掌
呪禁咒禁博士一人掌教咒禁生咒禁生六人掌學咒禁
て有を以て醫療と相並び行つる事知べ此咒禁
ハ謂ゆる神代の禁厭の法を傳へたりけむ其術也
是蓋智病條の禁火方云々元者大貴命神傳之金也袁介羅移年
通證ハ具

西地此想... 一

原氏曰今民俗野老里堰之所傳之方法有効驗而不

合注り意

△神祇譜天下四
方國人夫等令試
蒙旨に頼也と有
て其義を知べし
此語

出子彼邦書者甚多矣恐是上古二神之所定亦未可知
也と有ハ實ハ謂れたり説ハあむ有ける 傷寒雜病論
世之士曾不留神醫藥精究方術上以療君親之疾下以
救貧賤之厄中以保身長全以養生云々と有て彼
小也此二を並行ひし事我が上古に異あむざるを見
べし素問賊風篇ハ先巫知百病之勝先知其病所生者
可祝而已也と云ひ又 篇ハ恬淡之世邪不能深入
故移情祝由而已と有て 彼ハ上古ハ人心僥乏不
り故然事共て功を取ふりけり又説苑ハ
上古之鑿苗父之為醫也以管為席以芻為狗北面而發
言と云ハ易鄭ハ 義作十言之教故之有り其十
言消息と云ハ是ハ我ハ神家ハ太古を本として作
れハ三種被と云ハ吐普加身依身太女坎艮震巽離坤
兌乾波良比玉倍清給布と云ハ似たり若くハ右の十
言を取て言を換たり者多可但彼仙家にて云
二養神金丹ふどハ予ガ ○百姓ハ上子ハ神の御方
信の事ふれハ今注さず

日本書紀傳二十九

〇二百二十九

附て顯見蒼生と書されたりを此其治給ふ天皇の御上二就
て百姓一とハ云あり法華記水垣宮殿に人民王垣宮殿に公民有ふと記傳廿三二十子三丁意富美多訶羅と
訓べし書記子民人民萬民兆民黎民民庶衆庶黎庶億
兆人物人夫庶人居人口百姓元之蒼生業之黔首ふ
て皆然り大御寶と云義あり又王民公民良人ふとを
も然訓む事ふり是等ハ賤奴子對へて云稱あり然れ
ども常意富美多訶羅云ハ唯諸の民と云事よて此も然あり江家次第
非常赦子檢非違使の仰する詞子依其事殊以免給各
罷還本貫重犯不奉仕為公御財御調物備進礼と有る
是意富美多訶羅と云事の正しく所見たりあり採
要

所見たり又其廿四六十子公民とハ奴婢子對へて
良人を云稱よて孝徳天皇御紀ハ良良人良男良女
ふど共ハ皆意富美多訶羅と訓り疏紀四十子公民之
徒變作奴婢云と所見たり又廿九子寺神封戸百姓
云公戸百姓云一准公民云と有ハ神戸寺戸の
百姓と對へて公戸の百姓を公民と云り但必しも奴
婢子對へぬとも唯天下公民ふと云ハ民と云事あり
諸民と云へハ下掾の賤しき者の如くふれども然り
非ず天皇の御上よりハ貴人をも押並て公民と稱
事ふり臣建伴造國造八十部天下公民ふと並云時ハ

公民ハ下様の者を云ふべし又貴き賤き天下の
人も凡て公民と云ふ事も有り孝徳天皇御紀に凡國
家所有公民大小所領人衆云々不ど有ハ正しく官位
を帯て人衆を領する程の人を指ても公民と云り又名
ニ王民とも有ハ朝廷に仕奉る凡ての人共を王民と
云り取と云れたりが如く甚々太古にハ天皇を除奉
りてハ王臣以下の人共を混りて此を公民オホミタカラとも
民とも云て是即天地の興易可うぬ御定あり然
りと雖も民戸世を經て蕃息あり人民の尊卑其子
就て差異の成る勢ふれば自然に良と賤との差別ハ

出来たりよて良とハ古より土著の良民を云ひ賤と
ハ其資人を云て謂ゆる奴婢ハミテ戸令に謂ゆる陵
戸官戸家人公私奴婢等の五色を云あり陵戸とハ守
戸を云ひ官戸とハ公の奴婢を云ひ家人とハ私の僕
従を云ひ公私奴婢とハ公田奴婢私田奴婢を云あり
其孝徳天皇大化元年御紀に又男女之法者良男良女
共所生子配其父若良男娶婢所生子配其母若良女
嫁奴所生子配其父云々と有と以て良と奴婢の其
隔有を知べし其戸令に凡陵戸官戸家人公私奴婢皆
當色為婚と有て異色と相娶らざし
め給へり右に引れたる延暦八年御紀に五月己未太
政官奏言謹按令條良賤通婚明立禁制而天下士女及

冠蓋子弟等或會艷色而奸婢或挾淫奔而通奴遂使氏
族之胤沒為奴隸公民之徒變作奴婢不革其弊何導迷
方臣等所望自今以後婢之通良良嫁奴所生之子並聽
從良其寺社之賤如有此類亦准上例放為良人伏望布
此寬恩極彼垢澤臣等愚管不敢不奏伏聽天裁奏可之
と有を以て其刑の乱る可うさる事を知べし儲君
奉令の身喪戸絶無親者云々其家人奴婢者放為
良人之有を以て見れば其本主有て使はるを以て奴
婢あり已に其本主を亡し時ハ良と成る由あり使學
指南の名編戸籍素本齊民謂之良店戸倡優官私奴婢
謂之賤と儲傳十四百八十十九二十と粗云る如く
所見九り

實は公民ハ十
て無上き大御寶ふる事云と更ふるを又此言ハ今一
義を兼たり其ハ上古ハ務繕の事ハ一甚重
と止事無き物ヲ按てせ御在し坐て實は國家の大事

あり者ふり所以ハ海宮遊行章第七一書ハ元作高
田者汝可作誇田元作誇田者汝可作高田と有て天神
御子と申せども天位を所知者す以前ハ猶御田を
作せ給へり古事記玉垣宮段ふる大后の御言ハ且
波比古多ニ須美智能宇斯王之女名元比賣弟比賣茲
二女王淨公民故宜使也と有を御記ハ道主王者推
日本根子大日日天皇之孫彥坐子也と注し元比賣ハ
開化天皇の曾孫にて謂ゆハ四世女王子坐を公民と
申給ひ又風神奈詞ハ上ハ五穀物ハ始兵天下乃公
民乃作物云と有て下ハ王御等百官能人等倭國

能乃祢男女尔至万之云云以て其王御以下ハ悉々
 公氏ある事を知べく又大忌詞ハ然ハ別たずして
 親王等王等臣等天下公民能取作奥都御歳者云云と
 有を以て王臣以上の人も各田を作ルり一事を知べ
 十然れ心被大化元年御紀ハ凡國家所有公民大小所領
 人衆汝等之任皆作戸籍及校田畝其園池水陸之利與
 百姓と有ケ如く人を領ラ程の人より以下田園を持
 て戸籍ヲ編ラ限ハ皆良よて謂ウリ公民是あり又
 其百姓ハ奴婢と成て使ハル者ヲ賤と別たれたる
 子て天下公民ふど云ハ是をも含ラ事ふれども正

田見の義お
 して其田を知
 る事と云々
 即

引くハ賤ハ公民の外あり者あり備意富美多訶羅と
 云ハ王臣以下各田園とんて持つ限の人を云ふりければ
 言ハ大御田族の義よて其大御田ハ天皇尊の天津日
 嗣カと所知看す大御田を申一族ハ宇訶羅ハ生族夜
 訶羅ハ家族ヤカラ登母賀羅ハ友族トモカラの義あり是より又此を
 多美と云公田タモチ持の義意よりければ其ハ賤迄ハ巨
 め事と知べ一其證ハ出雲風土記ハ出雲郡美談御郡
 御子知加布都努志命天地初判之後天御領田之長供
 奉坐之即彼神坐御中故云三太三神龜三年改享美談
 即有正倉と有此此文意ハ所造天下大神の天御領
 田の長と為て供奉と給ヘ故ハ即其神の御社を
 御民と申す意あり多美と云ハ賤号ハ非なり
 備多美の美を持ふりと云ハ大山祇ハ大山津持子

○日本書紀傳二十九

○二百七十三

り海童ハ海津持あり 備日令ニ九給口分田者男二段
ニ思准クヘ知ベシ 女減三分之一五年以下不給云々有ハ是良民ノ賜
ニ所ノ口分田ニシテ夫婦ノ口分を合スルバ三段百
二十歩あり但此ハ不税田ニ非ズ善相公異見封事
請勅諸國隨見口數授口分田事條ニ謹檢案内公家所
以班口分田者收調庸奉正税也と有ルハ租調徭を出
セヨ餘を以テ世を過ス事ありガ男子ハ父子同トク
女子ハ母子賜ハヨ事トテ右ニ五年以下不給ト云ハ
集解ノ古記ニ人生六年得授田此名初班ト有ニ合セ
考ニ可シ又日令ニ凡官戸奴婢口分田謂此不與良人
税田也

同家人奴婢隨郷寛狹並給三分之一謂其寺奴婢者
不在給限也
有リ是賤民ノ賜ハヨ刑あり但賤ノ子モ集解ノ古記
ニ六年以上給之但今行事賤十二以上給之と見え
ル此ハ續紀養老七年十二月條ニ令天下諸國奴婢口
分田授十二年以上者ト有ル其年ノ格ふリ如此ク良
民モ賤モ共ニ同トク田を賜リヨ者ふルバ其モ公
御財ありと云ニ右ニ引ク官戸奴婢口分田を集
解ノ師説ニ亦是不税田也其百姓異也と云ルハ賤を
除キテ良民ノモを百姓トハ云ふりけり備右ノ口分
田ハ更ふリ官位を賜ハヨ就テハ其職分田位田也

賜ふ事あるが此外に私に墾たる田を持たざる私
田と云ひ先祖の功に依て賜りたるを功田と云ふ此
私田功田の二ハ皆其家子属たる者ありければ代を
此を領る故に名田と云ふ其ハ先祖の名を其田に遺
し傳ふるを以あり已小傳十九二十小引るが如く出
雲風土記小飯石郡須佐郷郡家正西一十九里神須佐
能哀命詔此國者雖小國ニ處在故我御名者非著木石
詔而即已命御魂鎮置給之處然即大須佐田小須佐
田定給故云須佐即有正倉と有る此を始として御世
に天子天皇を始奉り后妃ハ更ふり皇子等の御為に

御名代の田を定め御名入部と云ナせ御在り坐て後葉に傳へさせ
御在り坐けり遺意ありける者あり或説に其私田切
其名田を多く持て其族多き者を大名と云ふ万葉ニ
卷に大名児と云ハ良家の女を云ふて今ハ字音に呼
事ありども元ハ訓にて唱たりし者あり東鑑以下
記録に音にて大名と云ハ何れも領知廣き者の稱ふ
り又中古以来の田券又ハ記録ふと其某名と云事の
多く見えたりも其名田の事なり今も其一村の長た
る者を名主と云ふ其名田を持てる主あり謂あり又
東鑑建久四年六月五日條に八田左衛門尉知家典
多氣八郎義幹常陸國大名也と右の如くして甚の上
見ゆと云ふ皆然る言ふり
れり御世にハ氏族と品位の差別有るのこころ有れ
高きも昇りきも皆田を作らぬあは非りけり此を以
て其事を那理と云ひ那理波比と云ハ更ふり貴族の

人の別業を那理抄許云々其身ハ朝廷ニ仕奉ル為
 子宮所近ク家居シテ那理ハ片田舎多ク地ニ就テ物
 為ラ謂アリケリ其事傳十四百八十子巳ニ注ルガ如
 ク古ヨシ後ヨシ農工商ノ云状モ無クハ非レドモ概
 テハ其那理を物為ラ農の一民のニありけれハ其を
 本トシテ然カテ萬の事業ハ成ケレケル所以ニ巧
 工の物を作り商人の物を賣ルガ為ラ事を那理又那
 理波比ト云シ其本業ト有ク田を作ラ事ニ云を借用
 い九リ一者ニ有ケル儲又天皇尊の大御位を天津
 日嗣ニ称奉ル御事ハ一ニ記傳十四三十八天津日太

其天津日嗣ト
 對奉ルテ大御位ヲ
 といふ其百姓ノ
 ハ租調程を奉リ
 己は奉ル民ノ限の
 良を悉ク云稱不
 リ其不税田を賜
 へり其百姓の外
 ありを知ヘ一傍
 其百姓ト云中ニ

御神の給寄ツギヨリ賜ル物を受納レ所知者ヲ天津日嗣所
 知トハ申スル給寄一賜ニ物トハ即天下百姓の奉ル
 諸の御都岐物ニ是即天照日太御神の天皇ニ給寄
 一賜ニ物ナリ儲其種ノ物の中ニハ稻を主ト為リ其
 由ハ書記ニ天照太神又勅曰以吾高天原所御齋庭之
 穂亦富御於吾兒ト有ク是ナリ採要ト有ガ如クありけ
 ルハ王御以下の貴族ハ其大御田を賜リ領ズラ事
 廣クりけれハ自奴婢ヲ作シて作シてハむルも猶自作ス意
 味亦ハ田族トあり又田持ト事を知ヘ一右ニ引
 小江次第ニ依其事殊ニ以免給各罷還本貫重犯不奉仕

為公御財御調物備進礼と有ハ今其罪を赦して奉貫
子還し給ふふり今より心を改めて公の御田族と成り
耕作ヲ力を盡して御調物を備奉れとあり是を以て
百姓ハ天津日嗣小對ひ奉りて甚こ止事無き所由を
あむ知べりけり和名抄微賤類ハ人民日本紀云人
民和名比一云於保太と有る比止久佐ハ微賤子係
て云と可く可くを於保太加良ハ上ハ貴族子起り
て下ハ良人以上ハ且る稱ふれハ微賤の部子收ちる
ハ甚謂ハ無く又味氣無き定めあるづりハ於保太加
良ハ意富
美多訶羅の美を略けりふり諸鈴屋大人の大御宝と
云ル九ろを捨難しと云ハ凡此天下ハ人許りせり

合り空穂俊産巻子
子の御宝とし成給
ひしも知し御身別
と成給ひふは又今
ハ心し居たり若
宝を持て何事せり
思ふ可きと有し
例の子宝の事云
ふ

勝ルる寶ふむ非りけれハ寶ハ有る持欲き名称ヲ不
む有ける方葉五卷思子歌ハ銀母金母玉母奈尔世武
尔麻佐礼留多可良古尔斯迦米夜母又恋男子名古曰
歌子世人之貴慕七狸之宝モ我波何為和我中能産礼
出有白玉之吾子古曰者云と有ハ子の事を宝子も
勝りて愛しき由あり十六卷竹取翁歌ハ蟻衣之宝之
子等政と有ハ女子を美稱なり然ハ其始ハ大御田
をバ大御宝とい云べき事なり然ハ其始ハ大御田
族子起りて云意ハ大御宝の如く成ルる事なり然
二義ハ亘る事の猶證ハ記傳ハ天津日太御神の
御事を注されたる所ハ此ハ天津日太御神の大御任
を受傳へ坐て其大御業を嗣ハ天津日太御神の御行
ふりて云ルたる如く天津日嗣ハ本天津日給の事ハ
がく又天津日太御神ハ嗣給ふ由をも兼て二義子亘
れろを例として右の大御宝の○至今ハ自古至今の
説をも予に於て允諾ふ事なり

義あるを上の二字を略るハたり者不此ハ二柱
神代子從今以往の事を成一置世御在坐けり御

云又然
ルハ宝の王
子と此
子と此
子と此
子と此

△ふし其事を僕者
自今以後為汝存
之書夜守諸人而
仕奉故至今其溺
時之種之態不絶
仕奉也と有る文
法は同ト又同記

事の驗有を云所ありけりバ能其意を得て見る可き
者ふり其例ハ海宮遊行章第四一書火酢苜命乃伏罪
曰吾已過矣從今以往吾子孫八十建属恒當為汝俳人
と有て次の一書は是以火酢苜命苗裔諸隼人等至今
不離天皇宫牆之傍云々之有る右に從今以往之有る
應へて至今の語有を見べし又古事記故於今海鼠
口所也とも故是以至於今天皇今等之御命不長也と
も見え穴穗宮段に自往古至今時ふども有て必しも
以往の事は係なる事ハ無とも唯其始何れを云て其を古
として於今とも至于今とも云事常ふり万葉十八二

△恩頼ハ美多麻能布
由訓べし此

△名義美多麻能布
此ハ美多麻能布也
訓り

一ハ伊尔之敵欲伊麻乃乎追通尔奈我佐敵流云々
とも有り○咸ハ古語拾遺にも此と同文有る下子皆
有効驗と所見なる其と並ぶ言あり己子傳十四八十九
にも注るが如く古事記に是以悪神之音如狹蠅皆滿
萬物之妖悉發云々尔高天原皆暗葦原中國悉闇云々
於是萬神之聲者狹蠅那須皆滿萬妖悉發ふど皆と悉
とを並云る是ふり斯レハ此にも下子皆有効驗の四
字必有る將欲事ふむ其ハ下二百八十七丁に云べし○
蒙恩頼私記私記に美陀乃乃不由半加と不禮里と有り
古語拾遺又地神本紀に出たりも字訓共にも此に同ト

田道間守至道常
世國
●有之此を私記
は比志利乃美加止
乃美乃末乃不由
と有り

又神祇譜も國作大己貴神略凡此神生子一百八十
一神以尔五柱為珍子而天下四方國入夫等令咸蒙恩
頼此之縁也と云事有り又垂仁天皇九十九年御紀子
然頼聖帝之神靈僅還來又景行天皇二十八年御紀小
日本武尊奏平熊襲之狀曰臣頼天皇之神靈以舉兵一
舉頓誅熊襲之魁帥者悉平其國是以西洲既謚百姓無
事と有ハ神靈を又其如く訓り其四十年御紀ハ於是日本
武尊略中嘗西征之年頼皇靈之威提三尺劍擊熊襲國未
經浹辰賊首伏罪今亦頼神祇之靈借天皇之威往臨其
境略下と有て皇靈をレも同トく恩頼と訓じ事不

雄略天皇廿二年
御紀ノ類於天皇
有之須美多麻能
皇紀美多麻能命
由美典理之訓也

△由須と有少類
と書目て訓り日
本紀ハ恩頼と
書て訓り見
えたり又

り又顯宗天皇二年御紀小誰人主以奉天之靈と有る
靈字を美多麻と訓之又傍ハ美多麻能布由と訓添
たり一條大國御紀ハ恩頼利沢之可頼也又宣ハ利澤ハ名生ハふと云ふ日本紀竟宴歌得大己貴大
神天田部宿祢公望久尔年氣芝保古能佐記與利都多傳
陪玖留美太末農扶由蕃計輔曾宇禮之義を引て蓋御
賜之殖也と注ナレキ予不見ハ次ハ云ハ又同書
子後轉義為御魂之冬取於鎮魂祭也奧義抄白曾丹歌
暇無美加比無幾身佐陪急久哉御玉乃冬登宜毛云々
利歲抄祭亡魂以報恩穗故曰御魂之冬所謂荷前祭也
ハ御魂祭と申すハ家ハ荷前祭と云ハ書子ハ帝日升天皇美多麻能命
と見えたり四季物語ハ荷前ノ御事とて彼方此方

又神祇譜ハ又頼皇靈三皇御紀ハ頼皇靈之靈也と有て靈字と訓

今同字名義抄子米
具字と稱字基
具字と稱字基
具字と稱字基
具字と稱字基
具字と稱字基
具字と稱字基
具字と稱字基
具字と稱字基
具字と稱字基

王使仕奉るゝめ其人がく撰るせ給ふ云々漸々御
魂の冬し深る成り行けば何く此の御目追儼召の除
目逢ぬ可き家ハ申文調へ云々も有り又通證
集好忠魂祭る年の終小成りけり今日や又も逢む
と為るむ又後拾遺集十二月晦夜の歌ハ人の来夜
と聞けむ君も無し我住宿や魂無きの里と云を引
れき但此等ハ除夜亡魂来と云事報恩経とやむ引
出たり由はて此の故事ハ見えざれども
御魂の冬と云事の證ハ實ハ然る言あり
能布由の美多麻ハ御靈の義にて御賜の義ハ非ざ
めり其ハ右に引る御紀共ハ神靈又ハ皇靈ハ或ハ靈
字を然訓せたる共ハ同ト意味多
四年御紀に詔曰我皇祖之靈也自天隆鑿光助朕躬今

今第十三詔ハ天皇
神地坐神乃相宇
皇嶽奉佐根倍
奉利又天皇御
靈多知重賜
比撫賜大事依
三云

今万葉六下ハ天
地乃神安比宇豆
奈比皇御祖乃
御靈多須氣
三ハ有ハ等

諸虜已平海中無事可以郊祀天神用申大孝也乃云々
用奈皇祖天神号と見え統紀第十九詔に此誠天地神
乃慈賜比護賜比掛畏閑闢已来御宇天皇大御靈多知
云々第四十二詔に是方大神乃慈備示給幣物奈又掛
畏御世にハ先乃皇我御靈乃助給比慈給幣物
奈第四十三詔に掛畏閑闢已来御宇天皇御靈天地乃
神多知護助奉流力尔依豆第四十五詔に天神地祇御
靈乃ふと有ハ唯其神靈を指奉るのこみあらず其守坐
す方の御靈を申せらるて万葉五二十ハ聊布私懷歌
三首と有る中ハ阿我農斯能美多麻多麻比豆波流佐

奥儀抄三
小方物ハ其物
を守ル神有リ
詔ゆる多麻志
地多麻志
此意不台ハリ

良婆奈良能美夜胡尔呼佐宜多麻波祢之有美多麻
多麻比臣之一事^然此ハ傳十三^{三十四}十九^五廿一^四廿
六^八十^上注^下るが如く凡て其魂神と申す例多在る中
ニ保食神と宇迦之御魂神天照太神と天照御魂神攝
御氣野命と攝瓊玉命大己貴神と大名持御魂神大國
主神と大國魂神ふと相並び御在り坐す例もて某主
神と申すハ其主神子御在り坐を某魂神と申せるが
相副御在り坐て其御功用を輔相奉るせ給ふが故
其主神ハ愈尊く御徳大子成り其魂神の御功用愈益
と顯ハルさせ給ふ御事もて此子謂ゆる其魂又某御

今古事記明言
倣歌子母登都流
藝須惠布由
有ハ本劍末振
の義ありと以
通上所以を
知ハ
キ者

魂即右子攀たり美多麻子て佗より来りて其正身を
祐る謂ふり偕其布由ハ布流と同言あり万葉十五^{十三}
丁子多麻之比波安之多由布歌尔多麻布禮押安我牟
祢伊多之古非能之氣吉尔と有る多麻布流是ふり偕
又天武天皇十四年御紀子招魂之を美多麻布理須と
訓之古語拾遺ハ鎮魂を意富美多麻布理四時祭式
ニ鎮魂を同トク意富美多麻布理能祭と訓るを職
員令鎮魂の義解子謂鎮安也人陽氣曰魂魂運也言招
離遊之運魂鎮身体之中府故曰鎮魂と有るが如く運魂
を招き鎮むる子固て其魂の整備ハりて其勢の佗子

心を人子添うを心
を以て年氣と云ふ等しき
を以て年氣と云ふ等しき
を以て年氣と云ふ等しき
を以て年氣と云ふ等しき

振ニ義ありけり此の恩頼の言し然りて二柱神等
御力を教せ給ひ御心を一子為させ御在り坐て療病
と禁厭を方法を整備へ置させ御在り坐ける其御
霊の振ひて威に至り盡さるる隈無き謂あるありけ
り備又其振ハ山吹を山振風吹比禮と云べきを風振
比禮と云と一子て先子行て其活用き有る謂あり
右子引る
合せ味ハふ可くふむ有けり
二三四五七八九十而布瑠部由良と止布瑠部と
有る其布瑠の言をと思ふ可し備振字ハ本より布流
ありを望み能布と訓し其義有る故あり然るハ雄略
天皇九年御紀子會共復大振舒明天皇九年御紀子於

又彼天神本紀子載た
鎮魂の行事子謂
有る意

内子切の危る事より及びて

合し又毛詩注
振止也旅旅也言載
罷而止其衆以入
也とし有り

名我我子雲と
美多麻一才美加
云と見ん字鏡集
云此と美加道と訓
すの有り却りて
美多麻の訓無を
以思画す

新韻集

是散卒更聚亦振旅焉と有る是子俗威を振ふ力
を振ふふと云ふ等し通證
旅也と云り又史記子修徳振兵と有る正義子振整也
と注△又中庸朱注子振收也と有るふとを考合せて魂
を鎮むる事を美多麻布理と儲右子引る顯宗天皇御
紀あり霊字を美多麻とて美多麻能布由とも訓るを
今一同し義にて美加道と云訓あり有べりけり其
ハ傳十四百三十一上三六丁子注せろが如く和名抄神靈類
子霊日本紀云美太萬一云美加介と有る此ハ神武天
皇戊午年御紀子背負日神之威隨影壓蹠と有る影是
みて日神の御光を負ひ其御霊を戴給ふ由にて其二
年子我皇祖之霊也降鑿光助朕躬云と有る即其結

日本書紀傳二十九

〇二百八十二

大和物語に帝崩
此給ひて可畏き御
影を遺ひて御在
坐せし事

と成る所あり又神名式に謂ゆる長門國豊浦郡住吉
坐荒御魂神社並名を請和天皇實録に貞觀十七年十
神大月八日丁巳授長門國從五位上住吉荒御影正五位下
と有る更あり臨時祭式に凡住吉社長門國封租稅者
云々但豊浦郡封戸徭夫者便留荒御蔭社と有る此を
以て御魂と御影と其同ト謂ふ事を知べし此例に
壺丁四に可畏き御蔭を頼み聞えふ事云々須磨丁三
に此御蔭を隠れて物為給へば又丁十三唯此御蔭を隠
れ過い給へる年月甚く荒勝るも程思へ遣る水て
明石丁七に可畏き御蔭を別奉りし以來云々冷標丁二

子獨りて撫る袖の程無き覆ふ計の蔭をいざ待つ
又三丁十中々心病りて恋しき御蔭をい得見奉る事
又三丁十年々無き蔭をい彼恨忘る計と思給る事を蓬
生丁四親の御蔭留りたる心ち為る古き拙處と思ふ
子松風丁四に彼殿の御蔭を片掛てと思ふと有る又丁九
親の御無き影を辱るゝめむ事の甚くさふあむ少
女五丁十に限無き蔭をい同ト事と頼み聞ゆれど思ふ
子叶のぬ事の多うる哉又四丁十然る可き御影共丁後
に侍て後春の差別も思給へ別れぬを初音丁懸想
給ふ御影ころ実子見と詮有め水又丁十五斯やくして

も御蔭に隠れたる人多かり梅枝^{十三}に心深し御
在せしりバ亡き御影にも見直し給ふむ若菜上^{三十}
丁み方より就て御蔭に隠し給へる人皆其人ふらず
又^{十五}亡き親の面伏せ影を辱しむる類多く聞ゆ
又^{二十}後見聞えさせ侍らむ御蔭に代りてハ思さ
北下を又^{六十}頼りし御影共々様々の後此聞え給
ひて心細げに御在し坐めを鈴虫^{十四}に何事も先
頼りし蔭にハ聞えさせ習ひて匂宮^七に却りてハ
親のやうに頼りし蔭に思ひたれば橋姫^九に書
夜波御蔭に附奉りて侍りしバ椎本^{二十}に一所の

御蔭に隠るへたを頼りし所にて何事も心易く
て過しつれ又^{三十}世中頼む縁も侍らぬ事にて一
所の御蔭に隠れて卅余年を過し侍りければ寄生^一
丁亡き御影共も我をバ如何に此上無き決つけさ
と見給ふむ東屋^{十九}に數ありぬ身一の蔭に隠れ
も敢す哀あり事のみ多く侍らせぬバ頼りし方
にハ先ふむと又^{二十}古頼に聞えけり蔭共々後此奉
るハ中々尋常の思成りて浮舟^七に小歎詫び身を
バ捨とも亡^影に浮名流さむ事をこそ思へ蜻蛉^八に
亡き影にと書すさび給へる物の硯下子有けりを云

とふと有る御 蔭に隠るハ 御霊を蒙らうと云義
ありければ此の蒙恩頼ふ當なり是亦考合す可き事
と云ハ所思ゆハ 故思ふ御霊の事を御影に云ハ
を云時ハ陽にて頭ハ物ありを霊ハ其身中ハ藏
りて陰あり如くあり有けるハ影ハ御在し坐す者
神の御霊ハ至るの限ハ無く覆ひ御在し坐す者
ありければ御影ハ申せらるる御孫之命乃美頭
宮柱太敷立高天原ノ木高知皇御孫之命乃美頭
乃御舎任奉天ノ御蔭日之御蔭止隠坐天國止平
氣久所知食武と有る此天ノ御蔭日之御蔭ハ御殿の
屋を覆ふ事にて隠坐其内ハ在せ御在し坐す者
と等し言遣ふり美多麻と云ハ賜ひ賜ふるの類
よて事ハ廣く世中ハ行直る義ありしハ亦思合す可
き事ハ一ノ蒙ハ私記ニ加こ不禮里と有る従ふ可し此
言ハ記傳六^四十^十ノ御冠ハ美加賀布理と訓べし此名

ハ万葉五^{二十}ノ麻被引可賀布利二十^{十五}ノ美許登
加我布理^九ノ有る如く本ハ加賀布留と云用言あり
在体言ノ為なりあり字鏡ニ鬢鬢同加こ保利と見え
又憤^憤首服也頭巾也此太比乃加加保利と有り保と布
とハ通音なり然るを和名抄ノ冠又幘頭を加宇布利
と有る音便ノ轉れる言あり撮と云れば如く正し
くハ蒙ハ加賀布^流流あるを後の訓ノ加宇布流と有る
記れり有り用ふ可うらず外宮儀式帳ノ著明衣木綿
手次前垂懸^天天押日蒙^洗手不干之^二所太神乃
朝大御饌夕大御饌^日日別齋敬仕奉と有る蒙^底底を加

賀布理氏と訓之出雲神賀詞、伊都幣能緒結天乃美
カゲトコナリ賀秘冠利と有、清麻を結て天日鬘と為、冠より由
ありけりハ蒙御蔭と云二言、事右引、源氏物
語、御蔭隠れて云、有、如、流記第六詔、厚
支廣支徳、平蒙而高支貴支行、依而と有、詔詞解、
依而、其御蔭頼る意、二言上の蒙、此依、
天皇の蒙給、頼給、由ありと云、此、如、此、御
蔭の言を出さずして蒙字を以て其意を知せたる
者、亦、第十三詔、大御言、蒙乎蒙利云、婆、大御祖
御名、平蒙、豆、食國天下、平婆、撫賜惠賜、夫止、有、上、亦

蒙ハ黄金の出たり、験を云ひ下あり、蒙ハ養育の恩
徳を云て共、御蔭あり、第二十詔、凡人子乃去福
蒙福麻欲為流事、波、為親、奈止、第四十五詔、天地乃福
毛不蒙、自云、復天乃福、毛蒙利永世、亦門不絶奉侍利
云、災、平蒙、天、終、尔、罪、平、已、毛、他、毛、同、久、致、都、云、福
平蒙、身、毛、安、家、云、今、世、方、世、間、乃、榮、福、平、蒙、利、と、有、亦
皆上より、不、覆、二、状、あり、事、を、加、賀、布、流、と、云、り、又、
右、引、須、磨、子、此、蔭、隠、れ、物、為、給、へ、又、此、御、蔭、
子、隠、れ、て、過、い、給、へ、云、初、音、子、斯、や、り、御、蔭、
子、隠、れ、た、り、人、多、り、推、本、一、所、の、御、蔭、隠、れ、
たり、を、頼、り、所、多、り、云、一、所、の、御、蔭、隠、れ、
東、屋、身、一、の、蔭、子、隠、れ、敢、ず、云、有、其、御、蔭、を、
蒙、り、方、就、て、云、又、若、菜、上、方、就、て、御、蔭、子、隠、

△右引る後風土記ハ受恩類此書傳三十卷三百六丁ニ注す可△地神不紀ノ者矣ノニ字を以て終

△百姓至今感蒙恩類皆有効験有唯天下の人不知△御座を蒙奉る△見し然事△所有り又受恩類其流布△思類天下ニ悉其歸るを云ふけ其傳来の所中△下四等△乃利味大囉依の事手て事一説ベきあり候

一給へる人皆其人ありすと有ハ其御座を蒙る一む
る方子属て云よて自他ノ差有る事あり右ノ語ゆ
る加久須加久流ノ語共ニ ○蒙恩類ノ下ニ古語拾遺
此ノ蒙ト其意味背りず△
△皆有効験ノ四字有り此ニ有る將欲く甚愛たき
事あり此皆字ハ右ノ療病之方と禁厭之法とを来
て悉よと云意あり効験を引合せて志流斯と訓む事
あり子曆仁本子伊知自流伎志流斯と訓附たるハ殊
子委一き事あり備此ハ大己貴命ハ彦名命ニ柱神等
右ノ方法を之めさせ御在ー坐けらるを天下ノ人民相
傳へて今日子行ニ子皆灼然あり効験有る謂よて猶
神子祈りて其感應の御在ー坐す御事ト迄ニ係て云

る者あり伊勢風土記ニ員辨郡井上神社云々所祭園
韓神少彦名神也土地有疫疾則来此社神前掛長繩垂
白木綿祈其疫疫其効験不迴頭也又武藏風土記ニ在
原郡稗田神社云々所祭園韓神少彦名命也云々祈病
災莫不驗祈田莫不実又磐井神社云々所祭大己貴命
也社邊有磐井祈事土俗有妄願則其御手洗水變鹽水
事正直則如清水近國奇之祈病者取之服之其効験如
神土俗曰薬師水と有る斯ノ類ノ事共計へし盡す
程子多うりけらるを今其一ニを引出るのニ
上二百四十一下以下禁厭の件子註す事共を見り可
一此ハ唯効験ノ字を用ひたり證共を引りあけり拾

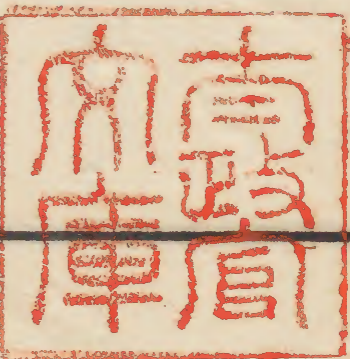
遺の此言の神社の應驗と述 偕其訓の伊知自流伎ハ
及ハル事ヲ明クメ云々理実 神武天皇甲寅年御紀灼然崇神天皇十年御紀灼
然敏達天皇十四年御紀灼然宜斷佛法灼然有
耶知攀那理と訓るを景行天皇五十一年御紀灼
然此云以耶知攀と注ガルナリ此字を万葉ハ伊知
自流久と訓り又安閑天皇元年御紀天皇建顯號無
鴻名孝徳天皇前紀故如日月也イテ有リ偕此ハ志流
斯と云言の上子伊知の言の冠ルル有リ允恭天皇八
年御紀歌區茂能於行盧奈比今夜辞流辞毛齋明天
皇四年御紀大御歌俱漢娜尼母昔屢俱之多多婆不

ど有を始として万葉ハ伊知ハ押靡而來之久毛知久
又六丁打出來之情毛知久九丁五欲見來之久毛知
久十丁三丁十思作來之雲知師又三丁十手寸十名相殖之
名知久十一丁九雲谷灼叢十七八丁十安麻射加流比奈等
毛之流久十八丁二十於久都奇波之流久之米多底二
十九十丁子打奈婢久波流等毛之流久と見えナリ此十
一卷あり灼字正字あり其伊知ハ一速くナリ云二一
最自ナリの義あり明白の意あり又掲焉を訓り炳焉も
同トと云り又ハ著明をも然訓り偕推古天皇
御紀ナリ氣を志流斯と訓皇極志流斯の言ハ巳子傳
天皇御紀ナリ相をも其同訓あり如く瑞珠盟約章第一一書ナリ既
十六三丁十注せるが如く瑞珠盟約章第一一書ナリ既

万葉集伊知流
久云々詠り

得勝驗第一一書云汝言虛實將何以為驗天孫降臨第
六一書云母誓已驗方知矣是皇孫之亂崇神天皇七年
御紀云時得神語隨教祭祀然於事無驗神功皇后元年
御紀云^{既而}皇后則識神教有驗云云是以今頭漢海水若有
驗者髮自分為兩即入海洗之髮自分也^不と見え古事
記玉垣宮段云故科曙立王令^{宇氣比}自因拜此大神誠
有驗者住是鷲巢池之樹鷲也宇氣比落如此詔之時
宇氣比其鷲隨地死又詔之宇氣比活尔者更活又在甜
白栲之前葉廣熊白栲令宇氣比枯亦令宇氣比生^{略下}
と有り備神功皇后五十一年御紀詔云朕從神新驗始^{アツキニシテ}

開道路平定海面之有て此ハ所驗を顯給の如く訓
るハ統紀第五詔云天地既大瑞物顯来^理第六詔云天
地大瑞者顯来^{上奈}第十三詔云勝神大御言驗^{中蒙}
利云云又天皇御璽^{多知}惠賜^比撫賜^夫事依^且顯自示
給夫第四十一詔云必異奇驗乎阿良波之授賜物^伊
未^{志家}云云如此久奇久尊岐驗^被顯賜^幣ふと有て驗
とも瑞とも顯と云る是ふて神祇の御方より示給云
物あり謂ありけりハ其用の顯を体^子為たり者あり
備此志流斯と云ハ物^子知識^{ニル}と云言の有を活用^トた
る語にて上云る志流久ハ其形状を云云言ありと



此ハ志流斯と居て著明き事有る称 とハ成せらる
 り祥瑞を志流斯と云し此子同トく又宗神天皇十年
 御紀小童女の怪しき歌謡いけを乃知其歌恠言于
 天皇神功皇后元年御紀子祈狩す所は是事大恠也
 仁徳天皇六十年御紀子陵守目杵の白鹿子化て去れ
 る所今視是恠者甚懼之ふと所見たる恠字を志
 流麻自と讀るハ俗子物の測る可うさる事を知ら
 ますと云と同言ありて此子謂ゆる志流斯の反對
 是ふり此表裡を考へて志流斯と云言の義を曉る何
 く亦む有ける 万葉子在中例共ハ已子傳十六卷子
 引出たれバ其所子就て見る可きふり

日本書紀傳二十九ノ六
 紙質五十三枚

九月十日

平岡好園

